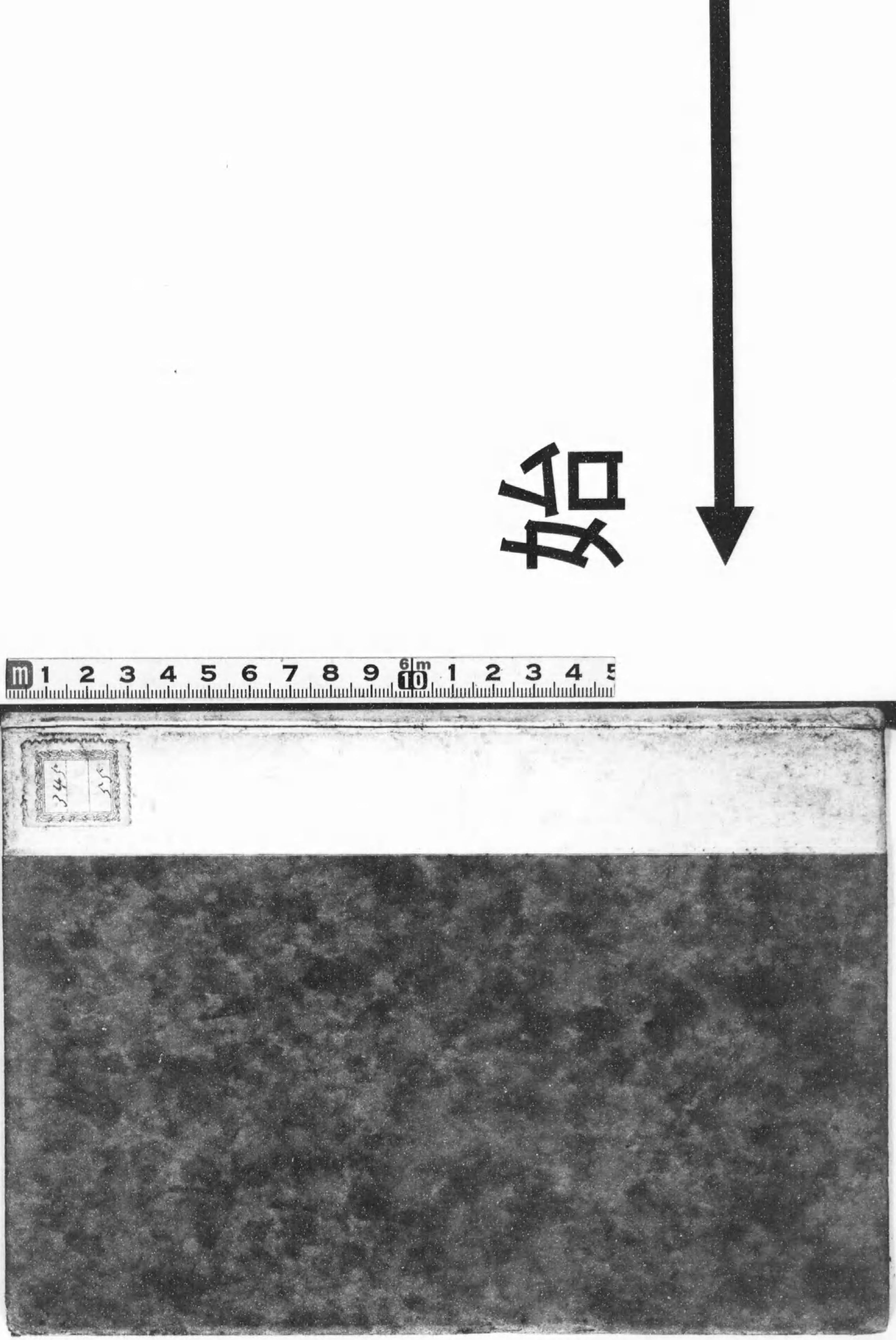


一九二八年

高明

雀の聲と共に新年の年は何も探ねず祝も鳴らさぬ平和の中に明けはなれた。

年齢の數と云ふ程ものが年一年と落て行くやうなのは事実だ。

自然に警戒せなくなると同時に規範や形式にも鈍感になるのであらう。

三つ子の魂百までと云ふことがある

二十八にかつてもあまり飛び離れて偉くなりそうもないが

何かでいい事件でも起うまいと凡人の神経は精錬されるよりよすがとなんぬのであらう。

あまり変らぬと云ふのは悠悠にみると云ふ位程なとしたらあまり悪いことでもあるまい。

嘉の四月は極めて平和だ。

これからモトニンを着て一週り年数の

~~345-55~~
特216
893

水本高明遺稿

昭和七・九・廿 帝國大學圖書之印

水本高明

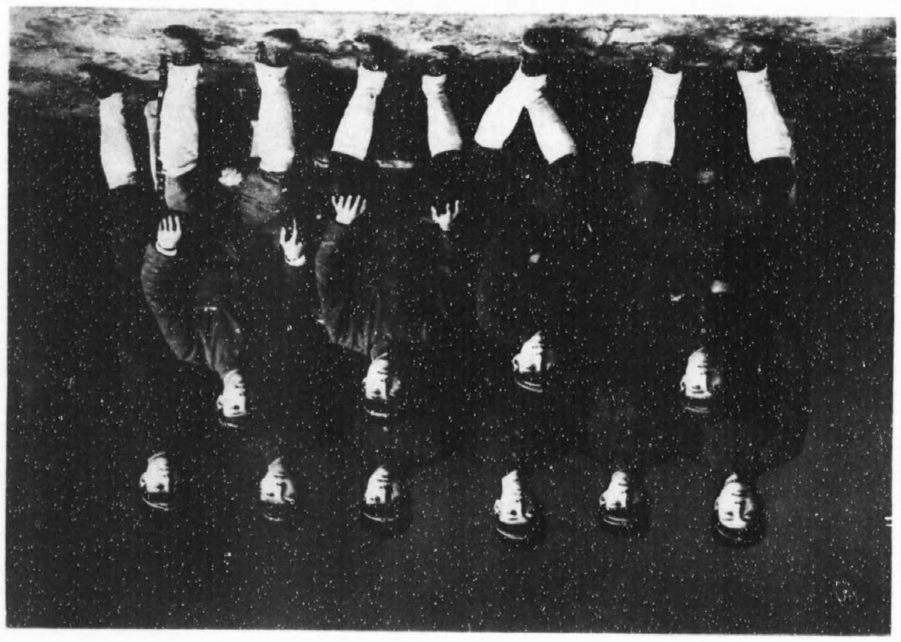
七歳

父八郎氏と

父八歳九月

拾九歳

天王寺中學校卒業前後列左端



（臨江剣道）臨港高校高中生長大

隆 正 治

商科大學豫科在學中

親友　池田小次郎氏と

舞文　出田小太郎

商科大學經濟學部中

西科大學の頃

砂丘の頂上

小林税務署々員一同

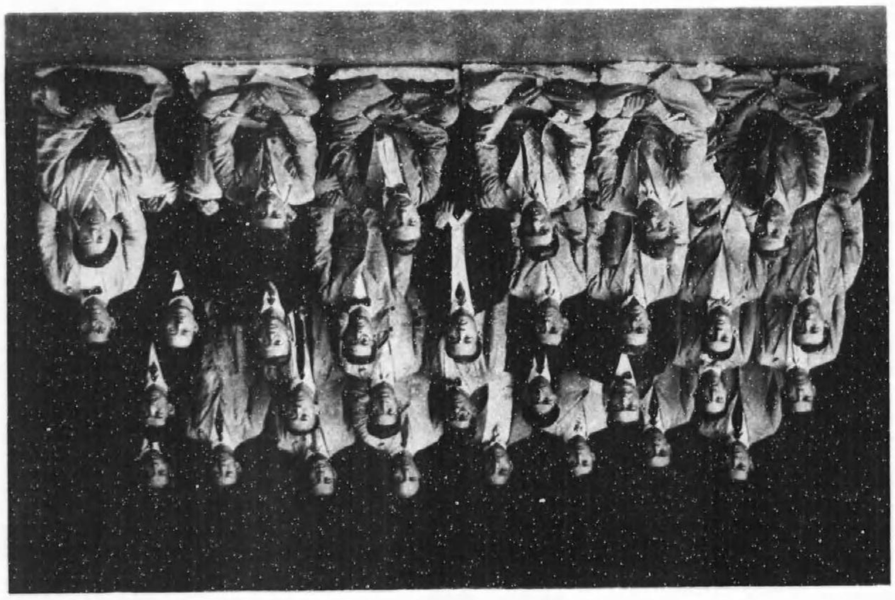
昭和四年八月二十六日撮影

小島　次郎　　川畑　義治　　藤林　清一　　三原　茂明　　丸山　慶一　　河野　義雄　　荒西　武　　美濃　忠美

坂田　健彦　　池田　昇一　　大野美夫郎　　木村　博　　鈴本　弘　　笠田　幸雄　　村田　芳蔵　　志茂　慶明

北島　一郎　　高島　美一郎　　小野　茂　　工藤二郎　　水本　署長　　鈴村大郎吉　　門脇　五郎　　谷崎　長平　　片山　賀吉

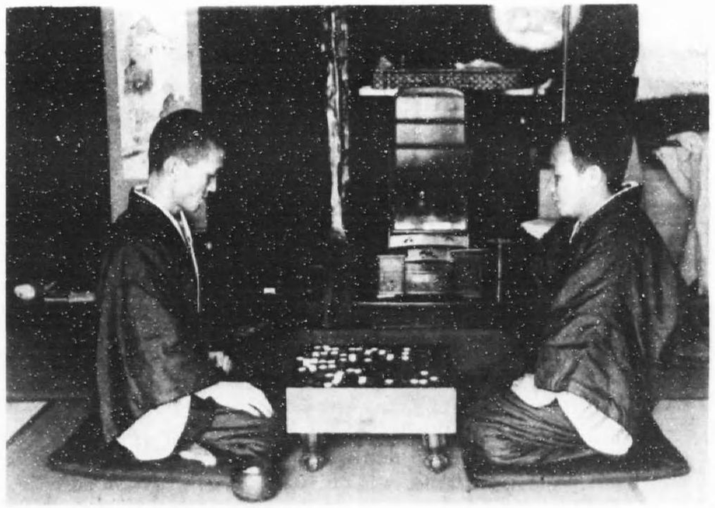
石黒　巣　　茂木　村　芳郎　　佐藤　芳男　　岩崎　茂一　　藤藤　藤　　武川　悦



（撮影昭和四年八月二十六日）

同一月々第養研樹小

署長時代



著 吳 翰 升

遺兒

高

生後百四十日

昭和七年一月八日撮影

高　浪　記

昭和二年一月八日撮影

生後百四十日

目次

感想……一
緑光より……三
閉眼嚥唇……三
深緑の天地……八
初夏の宵のすさび……一二
斷片の生活……一四
淡路つ子の天地……二二
焼芋より……二〇
ＹＡＫＩ……二〇
梅雨、暑中見舞……二四

一九二八年……四〇
燒芋の成功……四八
朝陽より……五一
山口君を偲ぶ……五一
磊落な性格……五三
大阪八聯隊から……五五
生活の中心……五七
兵營隨筆……五八
三冊の日記帳より……六二
稅務署長時代……六五
北海道警見記……六五
酒の味……七五
酒と熱……七六

秋田を顧みて……七八
評論……八五
夏季大學概論……八七
和歌……九七
消息……一〇七
日誌……一五九
年表……二二一

感

想

綠光より

閉眼噬脣

○

書けそうだ。何を書く。何でも書け。出るにまかせて書け。

池田から色んな感化を受けた。一時俺の手蹟が池田の手蹟に似通つた時代があつた。その時代俺は池田を尊敬した。崇拜した。否俺よりレベルの上の人間として池田に對した。或意味に於て一個の偶像視した。併し池田との關係は何だかその間に硬いものがある樣だつた。今は大分違ふ。これは俺が一見解を立てゝ池田尊崇主義、池田盲從主義から脱した結果だらう。池田を偶像として見ずに、友として滑らかな、心をきのない友情を通して池田を見る樣になつた爲であらう。俺

はもう心置きなく、池田に何事をでも云ふ事が出來る――殆んど何事をでも。

悪い感化をも受けた。その一例として今でも殘つてゐるのは反嘲だ。本尊の池田は、もう直つたらしい。俺は二三年前から、池田が食事が濟んだら反嘲を盛んにやつて、頗るいやな感を受けたものだ。何時の間にか俺はそれを眞似た。啞の眞似をすると啞になる樣に池田の眞似をした俺は牛になつた。今日も、俺は母からこの悪い癖を見付けられて、過ぎにし日、池田に投げた顰蹙――これは心の中でやつた事だ。當時池田の前で、いやな顏をする事も遠慮したものだ。――を母から受けた。

良い感化、それはあまりに澤山あつて、ごじや〳〵してゐる。兎に角澤山のよい感化を池田から受けた。一本松からも、石田からも、谷口からも、淺村からも確かに、多くのよい感化を受けてゐるに違ひない――その他の諸君からも。

向上心に燃えてゐる青年期にある俺達はお互ひに知識に餓えてゐる。德に渴へてゐる。悪い感化よりよい感化を受ける事の多いのは當然の事だらう。

お互ひに惰性の生活から遁れやう。向上の生活を讃美しやう。長所は皆んな各々曝け出して俺達の共有物たらしめやう。

――一九二〇、一二、二九――

○

利己の魂よ。如何に汝の醜惡なる。

汝は醜い。恥づべき男だ。

小さい人間だ。

遠慮がない。近憂が汝の周圍に滿ちてゐる。

一瞬の緊張を贏ち得る爲めには百年の弛緩時代を要する汝よ。恥ぢろ。

運命の神が汝に手ひどい打擊を與へる。周章を。狼狽を。その後の數瞬間、汝は本當の汝に歸る。淸い人間に。立派な魂に。その時こそ眞劍になる。決心をする。千萬人とも我往かんの氣慨を贏ち得る。その時こそ。賴母しい。過ぎにし日の夢現の間に送つてゐた事を回顧して後悔の臍をかむのもこの時だ。汝は涙を流す。そして神に加護を祈る。懺悔をする。涙に洗はれた汝の顏は希望に輝く。前途に横はる困苦の上を希望の光で包んでしまふ。その時こそ、汝は汝の位置を保ち得る。否汝は、すべてを支配する事が出來る。

汝我が靈魂よ。常に醒めてあれ。强く生きよ。

○

感激の生活にひたる人は才子ではない。
才子は打算の生活、眼先の勘定のみをする。
感激は人の活動から苦痛を除く。
感激の法悦よ。來れ!!

○

「世界の水本高明だぞ。」
「恥を知れ。」
「貴様は忘恩兒だぞ。」

○

赤心を人の腹中に置く。
俺はかゝる人を涙ぐましい感を以て見上げる。その手を握つて何かしらを盟ひたい。そして、こんな人のためなら我身を擲げ捨てゝもよいと思ふ。
彼は滿身赤誠の人である。

○

——一九二〇、一二、三〇——

餘裕ある生活と感激の生活とは、矛盾するか。
俺は兩者を同時に渴望してゐる。而して未だ兩者とも得ざるものだ。
餘裕あれ!! 餘裕あれ!!
感激の生活よ!! 來れ!!
前者は悠々たるおもむきがある。春の海の如し、大山の如し。
後者は熱に充ちてゐる。活氣がある。煮沸せる湯である。湯氣が立つてゐる。中は躍つてゐる。千里を走る汽關車を動かす事が出來る。
この兩生活の斷片が時折、俺の生活にも、もぐり込む事がある。その時俺の生活は光彩を放つ。知情意の作用が、そのすばらしい最頂點を見せる。
兩生活が一時に襲ふ事もある。その時俺てふ一個の實在はその大いさを百倍した樣に思ふ。
俺は、その時、決してこの二生活の矛盾せない事を確信する。

× × × ×

餘裕ある生活をしてゐると他人から思はれながらその實決してしからざる人がある。
俺が餘裕ある生活を送つてゐると誤想してゐた人があつたかも知れぬ。俺は赤裸々に云へば今

迄餘裕どころか、全く其日暮らし――精神的意味に於ける――の生活を送つてゐたのだ。

仕事を追はずに仕事に追はれてゐた。

――一九三〇、一二、三一――

附　記

項を改むる六つ、前後矛盾撞着或はあらむ、思想は一瞬間も靜止せず、時を異にして書かれたる六項目、各々異なる處なかるべからず。されど、そのありのまゝの感想を吐露せるに至りては前後通じて然り。

「閉眼囁唇」なる題は第二項第三項を書きし日に思ひつきたり。

（綠光處女號所載）

深　綠　の　天　地

○

甲と乙とが沈默の内に、机を、をいて向ひ合つて座つてゐた。

甲が乙に惡戯をした。

乙はその惡戯に氣がつかなかつた。そして暫らくして無邪氣に甲に話し掛けた。

甲は淋しかつた。直にその惡戯を恥ぢた。

二人の間を再び甘美な沈默が占領した。

二人の間の友情は確かに一歩深くなつたのだ。

○

初夏の綠が大分濃くなつて、陽の光が暖かく　を透して脊中に感ぜられる五月末のある午後、一人の男が氷川圖書館の入口で下駄を脱いでゐた。白いネルの着物を着た一人の少女が一緒に連れて來た小さな妹のゴム靴を脱いでやつてゐた。男が廊下へ上つた瞬間、その少女は頭を擡げた。そしてはしなくも男の身體と輕く當つた。男はどうも失禮と早速口を切つた。少女は微笑んで男の顏を見た。男はどうも失禮しましたと云ひ直した。少女は汗ばんだ顏を少し赤くして輕く會釋をした。そして自分が先に詫まる事の出來なかつた事に對して、きまり惡さを感じた。そして廊下の片方へ身體を寄せて男に廊下の道を讓つた。男は惠まれた樣な感に打たれて、輕い氣分を懷きながら閲覽室へ入つた。

○

自己を信ぜない事は總べてを疑ふ事である。
自己嫌惡の生活は萬物否定の生活である。
私は自己を信ずる。自己肯定の生活を送らう。この信念!!それが大切である。

○

活動の生活を渇望する男と、孤獨の生活に憧れる男と二人の男が住んでゐた。
前者の活動には無理があつた。淋しさが常につき纏つてゐた。彼は獅子吼した。併しその聲は中味のないガランとした聲だつた。彼はまだ充實した内面的生活と確固たる自信とを持つてゐなかつたから。
後者は知らぬ間に孤獨を脱してゐた。彼の孤獨は上つ面だつた。彼は孤獨を守るべくあまりに多くの野心があつた。小さな野心を捨てゝ大きな野心に入らなければ眞の孤獨は得られない。
活動大いによし。孤獨大いによし。
無理も又よし。獅子吼決して惡からず。野心亦大いに可。
二人の男に惠あれ。

○

人は境遇に支配される。
人は自然に支配される。
人は人に支配される。
天才とは境遇と自然と人とを征服した人である。それは天の屬(ゾク)である。

○

或日、友から自分の所說を小氣味よく駁擊され遂に友の論に納得せしめられた時、僕は非常に愉快な感に打たれた。其の日の僕は祝福される價値がある。

○

少しも無理のない態度をとり得る樣になりたい——あらゆる場合に。
喜ぶ時も悲しむ時も、笑ふ時も泣くときも、それが眞底(シンソコ)からの喜であり悲であり笑であり淚であらしめたい。
笑は屢(シバ)々「生活の方便」と墮落し、淚は時々、自己紛飾の手段となる。
それらの笑や淚は不純であり僞物である。本來の純眞さから如何に離れてゐる事よ。それらは何等の價値なきのみならず大なる害物である。擯斥すべく、唾棄すべきである。(綠光第五號所載)

初夏の宵のすさび

御手紙有難う。

時の歩みのあまりに速かなるに驚く、もう一ケ月あまりで又夏休が來る、東京へ來たのは五月上旬、この學期こそは何かやつてやらうと思つて出て來たが、ほんとうに何もやらずにもう半分を過した。青春!!青春も、かゝる儚なさを以て、かゝる速さを以て過ぎつゝあるのではなからうか、若葉の月、すべてのものが潑溂として思ふ限り生長する初夏の天地に、澄み渡つた青空をのぞむ時、うたゝ魂の躍動、全肉の武者振ひを禁じ得ない今日此頃、實際の生活に於ては、何等の展開なく躍進なく不相變惰力で生きてゐる、はがゆさ、物足りなさ殘念至極だ。

さうだ君の云ふ樣に俺にも感激がほしい、刺戟がほしい更に充實せる、はち切れさうな溢れ出さうな力の把握に喜びたい。あゝ併しそれは今迄の俺には拒まれてゐた。

信州方面へ修學旅行に行つて來ました。五月二十五日から二十八日迄、大いに騒ぎ大いに歩き

大いに語つた、面白かつた有益だつた、しかしやはり自分は心の底に淋しさを持つ、心の底深く巣食つた根強き空虛そのものは、アルコールに依る一時的の神經の麻痺や、口から出まかせの大言壯語や、愉快でたまらない樣に見せかけた馬鹿騒ぎで除去されない。空虛!!しかり空虛だ!!それが自分のあらゆる行動に關して自分を逡巡せしめ、孤疑せしめ或ひは惰力で動かしめ、因襲の影にかくれさせ、そして最後に物足らなさを感ぜしめる、何等の人生觀をも掴み得ずに舊生活に引きずられ、その殘滓を食つて生きてゐる者の姿のみぢめさよ。

僕は山へ入つて三日三晩程考へ込みたい樣な氣がする、兎に角現在の奴隷の生活——然り俺は因襲と惰力なる暴君の壓制の下にその權力の束縛の下に、その奴隷として安價なる否無意義なる毎日の生を樂しんでゐる、——それは俺には堪へられない、自分自身のあるじでありたい生活をして自分のものたらしめたい。

試驗と云ふ魔物が一ケ月の後に黑い目玉を開いて待つてゐやがる、癪だ癪だ癪にさはる、試驗を癪にさはる、俺自分も癪の種だ、夏休迄もう一ケ月だ、何にもせずに、この一ケ月を送るのか、するべき事が山程あるではないか。

俺は今晩少しせき込んでゐる、落付きがない變な手紙を書いて了つた、併しこれは一氣に書い

たのだ、御互ひに勉強しよう君の手紙は落付いてゐる、何だか羨ましい様だ、俺には現在少なくとも今晩君の手紙にあらはれた様な餘裕がない、是は現在の生活にとつて決して悪い心の持ち方ではないと思ふ。

又今度落付いた、音信をしよう。

六月四日、外は靜かなり、されど靜寂の内に夏の宵の特有なる音響ひそめり。

吾心はせはし、されど緊張せり。

夜九時記

（綠光第五號所載）

斷片の生活（淡路から）

×

すべては生きんが爲めにである、眞に生きんが爲めにである、眞に生く、これが吾人のすべての行爲の目的であり動機でなければならぬ、原因であり結果でなければならぬ、書を讀む、それ

も眞に生きんが爲めにである、思索をする、それも眞に生きんが爲めにである。

眞に生きるとは良心の命ずる儘に行動する事である、絶對者の命令に服する事である、絶對者として生きる事である、絶對者と合一する事である。

×

人は必ず死なゝければならぬ、併し光輝ある死は、光輝ある生のみが持つ事を得る、光輝ある死が尊いのではない、光輝ある生が尊いのでもない、その生死をつらぬく光輝ある精神――宇宙的精神が尊いのである、跪拜に値し驚嘆に値する程、尊嚴で偉大であるのである。

×

病魔に冒される時、人は往々氣短かになり肝癪持ちになる、氣分の悪い時、人は活動より安眠を求める、肉體的缺陥、肉體的病氣は精神的に缺陥を生ぜしめ若しくは無能力たらしめ、或は思考力をも奪ふ。

肉體が主か、精神が主か、肉體的に弱い、同時に精神的に、弱い私は時々この疑問に苦しめられる。

×

體力の弱いものは、他人との接觸を、接觸に依りて起る種々の氣配(クバリ)を避けたがる、これを友愛の情が足らないと云つて非難するのは、無理な攻撃ではなからうか、友愛の情を以て直接に他人と接觸する事が、自己の莫大な苦痛を伴ふ時（單に肉體上から見て）その接觸を避けてはならないのだらうか、彼は間接に、併しより深刻に他人と融合する事が出來ないだらうか。

これは、現實と妥協し、利己心に訶諛し、肉體的に薄弱なと同様に精神的に缺陷のあるのを誇らんとする平凡人の單なる言ひ譯に過ぎないであらうか。

×

おゝ大いなる灼熱の日輪。
希望と光明の源よ。
ユララ〳〵と東の海の涯(ハテ)の山より上る。
今日一日の活動の
エネルギーを包攝し得る限り。
包攝して、その一日の首途に上る。

自信に充ちて、灼熱せる自信にみちて。
あゝ萬物に希望を與へ成長を與ふる汝よ。

……

おゝ日輪は上りぬ。
水蒸氣に充てる夏の朝空に
ユララ上りぬ。
波上に金光ぞかゞやく。
あゝまばゆきかな偉大なる魂よ。
渾身これ熱。
渾身これ光。
汝の前にすべては平服し揖讓す。

×

時計を見ると四時半だ。
庭に出る、東の空を仰ぐ。

VENUSが輝いてゐる。
曉の明星だ。
何と云ふすばらしい光だ。
水々しい、青い、慈愛の籠つた、
あゝそれはまさしく、
戀人のまたゝきだ。
意味の深いまたゝきだ。
柔かく俺を包んで呉れる。
冷かで、
そして暖かだ。
Fの様な水々しさ、併しそれより崇高だ。

×

たしか中學五年生の時だつたと思ふ、たゞさへ暗い大阪の家に降りつゞく梅雨の爲め、すべてが陰氣で薄暗かつた或る日の午後、母は大なる發見をした様に、その髪の中に二三本の白髪のあ

るのを私に見せて呉れた、私は早速そげ抜きを持つて來て、いくらかの黒髪と共に、それを抜きとつた事を覺えてゐる、「父母老ゆ」私は一種戰慄に似た淋しい感じをその後で味つた、一昨年の暮から昨年の初めにかけての私の大患、昨年の十一月から引續いて病んでゐる父の看護と種々の心勞の故もあらう、私はこの夏のある朝、母の頭髪があまりに白くなつてゐるのに驚いた。
「白髪(シラガ)をとりませうか」私は笑ひながら云つたのだつた（後から思ふとよく笑つたり出來たものだと不思議に思ふ、殘忍なる笑顏(エガホ)をこの時、天は私に見たであらう）
「もう頭中一杯になつた」母は答へた。
「ナイスでもつけたらどうです」勢にのつてこんな事を云つて了つた、母は默してゐた、隨分ひどい事を云つたとりかへしのつかない事を云つたと後で非常な後悔の念に責められた。

×

八月三十一日に植木屋が來て庭にある松の木をつくつた、その松の木は三本あつて、僕の誕生記念に植ゑたものだ、丁度僕と同年で今年で滿二十歳になる、もう高さが三丈はある、母方のお祖父さんが手植ゑたさうである、一本だけでは枯れた時に緣起が惡いと云つて三本植ゑた處が三本ともついて段々生長した、それが三年程前に一時赤くなつたので驚ろいて植木屋に手入をさせ

た、其の後正に意氣衝天の概で年々綠の若葉をヅン〳〵伸して行つた、これを眺める事は僕にとつて大なる慰安であり刺戟であつた、何と云ふすばらしい成長振りだつたらう、旺盛なる生活力がその内部に溢れ漲つてゐるのだつた。

去年の事だつた、八幡さんの神主に家を貸して置いたら、あまり松葉が繁つて座敷からの眺望が惡いと云つて下の方の大きな枝を打ち拂つた、その夏歸鄉してこれを見た僕は非常に奮慨した、素敵に恰好が惡くなつてゐた、不自然きはまる畸形の松と化してゐた、父にたのんで植木屋に下の方と均衡をとる樣に上の方の枝を刈り込んで貰つた、これが恐らく第二回目の手入れだつたと思ふ、それから第三回目が今度なのだ。

父は病床から、緣にさげてある日覆の布を上へ繰り上げさして靜かに植木屋の鋏の音と共に心地よく枝が下へ落ちるのを眺めてゐた。

「松の木の癖を矯めよるのだ、

お前も明日から賢こくならんといかん。」

かう云つて微笑した、顏はやせてはゐないが筋肉はたるんだ樣で、ひきしまつてはゐなかつた、半日仕事で、この三本の松と一本のもちの木をつくつて植木屋は去つた、手間賃は一圓五十錢だ

つた、私はつくられた松の木をつく〴〵と仰いで見た、そして、あまりに坊主になつてゐるのに今更ながら驚ろいた、私の象徵、それは私の象徵でなければならなかつた、それはあまりに曲がなかつた、あまりに單純で内部がすつかり見えてゐた、あまりに直く淸廉すぎ寧ろ小さかつた、深味を見出す事は出來なかつた、父が私の幼少の時から私にとつて來た、束縛主義と、その結果たる現狀をふと聯想した、委縮せる現在の我個性を思つた、何といふ適切な象徵だ、現在の自己に嫌惡を懷いてゐる私は、つくられた松に對して反感を持たないではゐられなかつた、それからこんな手入れはして貰はない方がいゝと思つた。

……

私は天を仰ぎ更に裸の松に向つて斯う叫んだ。

願はくば我をして飽迄も我個性を伸ぶるを得せしめよ。

汝松よ、我が兄弟よ、共に行かん。

そしてお互ひの個性を思ふ限り伸張せしめやうではないか、遠く、高く——天へとゞく迄。

汝は我だ、我は汝だ。

……

翌日は九月一日であつた、二百十日の厄日は清澄なる青空と眩ゆい太陽とに依つて裏切られた、三本の松は蒼空に向つて突つ立つてゐた、その常緑の鋭い葉は音なく渡る微かな風に搖いでゐた、それは内に溢るゝ活力のやむにやまれぬ武者振ひの微動であつた。

（一九二一、七―九、緑光第七號所載）

淡路つ子の天地

○

淡路つ子とは僕の事である。

淡路つ子の天地は淡路である、日本でもある世界でもある、宇宙でもある、我一身でもある、水本家でもある、我が友人でもある、天下の人總べてでもある、或は無であるかも知れない、有であるかも知れない。

淡路つ子の頭はシムプルでもある、複雜だとも云へる、混沌と云ふのが一番あたつてゐるかも知れぬ、結局わけのわからぬ、淡路つ子の頭から、茫漠たる淡路つ子の天地を、十枚の原稿紙に擴げやうとする僕はやはり淡路つ子である、これだけかいて山口君の所謂「文字の遊戯」と云ふ句が又々、ひよつこり頭の一方に巣食つてゐるのが躍つて出る、成程俺の書いてゐるのを文字の遊戯と云ふのに違ひないと思ふ、諸兄よ、文字の遊戯以上に超越する事の出來ないわれを憐め。

○

五時過ぎに飛び起きる、雨戸をあけてボンヤリ外を見る、庭の松の木の枝を透して、井戸の釣瓶を透して、向ふの山の端に續いた雲の、薄赤色と乳色をまぜた、天女の肌を思はする神々しい色に彩られてゐるのを見る、跣足で井戸側へ走る、銅色をした眞鍮の、緣が大分傷んでゐる金だらひ（素敵な恰好素敵な色だよ）に、冷たい水を汲む、その冷たい水を口に入れた時の舌ざわり、總身がひやつとする、（書き晩れたが井戸側へ走る前に大抵鳴門の樹の根元に小便をする、朝のひや〳〵した空氣が、ぢかに裸身のからだに觸れて、毛穴がたつて、引きしまる樣だ、）洗面が終ると冷水摩擦だ、それから深呼吸、それからバケツを持つて來て庭へ水をまく、鳴門蜜柑の木の根元と、柿の根元と、庭の中にある小さな畠には充分に水をやる、思ひ出した樣に僕と同じ年の三本の松の根元にウンと水を張込む事もある（これは僕の誕生記念に、御祖父さんが植ゑて呉れた

もの、二三年前少し勢が惡くなつてゐたが、今はよくなつて常盤の綠を、敢然とまとつて、立つてゐる、)それがすむと、桶に二杯づゝ(大きな桶だぞ)五回水を汲む、釣瓶の音はいゝものだね、その水は風呂に沸かす爲めに風呂場へ運ばれる、五時半になると親類の子で、中學四年になる池澤君が英語の本を持つてやつて來る、倉の横から床机を、鳴門の樹の側へ出して倉から吳座を出して敷き、机をはさんで、英語の勉强をやる、倉の入口のすぐ下には、おしろひの花が可憐な色を見せてゐる、この花は晝すぼんで、夕方から朝迄ひらいてゐる、かすかな浴後の薄化粧を思はする香と、ひなびた、田舍娘を思はする赤色、花の形もいゝよ、朝飯を食つてからひる迄、病父の時折の御召しと、一度自轉車で濱迄、魚を買ひに行く以外は、鳴門の樹の下で、英書を讀んだり雜誌を見たりする、讀書に飽きると、木登りをやる、竹の杖を提げて鎭守の森へ行く、そして鈴を鳴らして頭をさげる、その境内を區切つた石垣に一つ一つ書かれた寄附者の名前を讀んで見る、水本高明と書いたのが、水本八郎と並んで大きな葛のつるの、木からぶらさがつてゐる傍にある、上に小さく大阪とかいてある。

○

或朝ふと大きな蜘蛛の巣と、その眞中にジッとしてゐる大蜘蛛を見出した、持つてゐた竹の杖

で先づ巣の一方をさゝへてゐる糸を氣合諸共切り離した、巣はその位置をかへて、蜘蛛は大きく二三遍ゆれた、かくて順次隅を切つて蜘蛛を地上に、竹の先で、打ちつけた、口の先から、糸を出しながら大急ぎで逃げて行く奴を追跡して、竹で一本の足を押へた、强くそれを地にこすりつけた、きかなくなつた足をひきずりながらまだ逃げて行くのを追ひかけては地にこすり、追ひかけては地にこすりしてゐる内に、足は到頭四本になつて了つた、もう蜘蛛は動けない、俺は非常に殘念な事をした事に氣がついた、生をこの世に享けて來た以上、人間と何等の相違はないのだ彼も一個の神なのだ、俺は大急ぎでそれを竹の先に、はひ上らせて生垣の上へ持つて行つて離してやつた。

この事があつてから一二日經つた天氣のいゝ朝、僕は深呼吸をしながら、生籬の傍に行くと、一疋の大きな蝗が、先日足を切つたと同じ種類の大蜘蛛の巣に引つかゝつて、身體中、蜘蛛の糸で卷きつかれ、しかも、その大蜘蛛は自分の口で、かたく蝗の頭を嚙み兩方とも動かずにゐるのを見た、僕はギョッとした、見てはならないものを見た樣に思つた、蝗は勿論、飛んできて、くもの毒手にかゝりもう、その時は息の根がたえてゐたのだ、何と云ふ、あらはな生存競爭のあらはれだ、俺は蜘蛛を憎まないでは居られなかつた、併し何だか恐ろしく、身顫(ブルヒ)を感ぜざるを得な

かつた、大急ぎで眼をそらして、そこから逃れる様に退いた。

○

パルチザンの血は俺の中にも混々と流れてゐる。

俺は或日近處の小さな丘へ登つて蟻の大虐殺をやつた、小石で列をなして動いてゐるのを片つ端から殺しに殺した、殘忍性を俺は豐かに持つてゐると思つた、パルチザンの獸的と云はれた、あの行動が、そんなに全然自分とは緣遠いものではない様に初めて思つた。

俺は折々非常な常識はずれた、殘忍な、或は、恐ろしい事を心に目論む事がある、とても口に出して云へない様な淫らな大望をも抱く時がある、世の最大惡人にも劣らぬ様な所業を心の內で行つてゐるのだ、實際、天下の大學生だとか云つて、威張れた柄ではないのをつく〴〵思ふ時がある。

○

お伯母さんが云つた。

「今年はもう土用になるのに、蟬がちつともなかぬ、何か事があるのかも知れん」

それから二三日してから小さな蟬が一つ、庭へ來て、鳴いた。

お伯母さんは、だまつて井戸の端でおひつを洗ひながら聞いてゐた。

○

放任主義の大なる長所は獨立の氣象を得るにあり。

子供は放任主義に限る。

偉大なる人格者、奔放なる詩人は放任主義教育の下に生れん、束縛を破りて自由の爲めに叛旗をひるがへすものも又偉なり。

○

都會を故鄕に持てる人は禍なる哉。

否、田舍を故鄕に持てる人は幸なる哉。

何と云ふ懷しい大地の香に、草の色だ、山の姿だ、海の深さだ、穹窿の廣さだ、自然!!あゝ自然よ!!俺の母だ、俺の愛人だ、俺の息子だ、孫だ、俺の慰勞者だ、俺の激勵者だ、俺の救助者だ。

日の光よ、雨の音よ、清い空氣よ、オゾンよ、花よ。

月よ、虹よ、更に幾多の生物よ、蛙の音よ、微風の囁きよ、樹々のざわめきよ、四季の聲音よ。

都會に住む人も幸だ、たとへそれがごく稀れだとは云へ、一度足を田舍へ踏み出したなら、心

ゆくばかり、自然の恩惠にひたる事が出來るから。

田舍ではすべてが淨化される。

工場で活動せる機械の響もこゝ田舍では健康の表象の樣に思はれる、黑い煙は元氣よく煙突から飛び出して來る。

紛飾!!紛飾!!紛飾でかためた人間は鼻持ちがならぬ、都會の淑女よ、白粉の化物よ、僞善の鄕土よ、新らしい女よ、鄙の乙女子の純な心と姿を思へ。

何と云ふ飾らざる鄙の乙女達ぞや、尊し、たゞ尊し、彼等こそ眞の人間だ、天國に入る人達だ、赤裸々!! 赤裸々、何と云ふ健康な肉體だ、何といふ純淸な神聖な心を彼等は持つてゐる事だらう。

○

もつと大膽でありたい、告白するに大膽でありたい、素直でありたい、俺の日記の如何に常套に失してゐる事よ、實際俺は今迄、自分の生活の方針に關して、連續せる、誤まれる考を持つてゐたではなからうか、否無意識的にその錯誤に陷つてゐたのではあるまいか、否、更に詳しく云へば、その錯誤を意識しながら之を看過しようと勉めておつたのではなからうか、然り俺は劣等な感情と劣等なる知とをあまりに跋扈せしめて居つた、朝寢もし、なまけもした、これ前者の趣くまゝにまかせてゐたせいだ、勉强もし本も讀んだ、これ知を養ふに注意した證據だ、併し!!あゝ併し心の內省、魂の反省に關してどれだけの時間をさいたか、自分は此等の時間を恐ろしいものゝ樣にして、眼を閉ぢてそれを避けつゝあつたではなかつたか、それは恐ろしい事だつた、今迄の道程を不相變惰力で續けて行くやうな事があつては俺は知らぬ間に地獄に陷らなければならぬ

さて何から考へたらいゝのだ、一度自分が自分の考へるものに至つたとき、如何にその命題の雜多且複雜なるかに驚かずにはゐられぬ、俺は實際今迄何にも、考へてゐなかつた、ほんとに何にも、實際醉生夢死だつたのだ、さあ併し俺はもうそんな生活を棄てなければならぬ、運命が俺にさう囁く、俺にも大きな天職がある樣だ、俺は俺の天職について考へなければならぬ、根本問題から行かう、數歩否數十歩俺より擢んでゝゐる山口慶治君の態度が羨ましい、事物の眞を正視する勇氣を與へよ、能力を與へよ、自己分裂は、この後とも屢々俺を襲ふ事だらう、併しそれに屈せずに、それを征服して進め、勇ましき戰士よ。

——一九二一、七、二四——

何時迄も同じ事ばかりを云つて誠に申譯なし。

もう今度限りにて、こんな事は云はぬつもりなり。

（綠光第七號所載）

燒芋より

YAKI

大いに活躍しよう。
入營一年、深遠な哲理を考へぬ。
この頃頭が少しぼんやりしてゐる。
海綿の樣に總てのものを吸ひ込む。
入營一年得たものは何ぞ。
曰く、無。
與へられたものは乍併ありさうだ。

疲れる！　疲れる！
死ぬ氣でやつたら何でもやれる。
それも程度問題だ。
ナポレオンにあらざる限り。
毎日二三時間の睡眠では
本當に死んで了ふ。
フリー、THINKINGの時間は
非常に限られてゐる。
靜かに自然を凝視する、傾聽する。
感覺する。
魂をみつめる。
考へ込む、ねむる。

本も讀まねばならぬ

飜譯もしなければならぬ。
時計の様な正確さ。
（乍併時計でも戀人に會つてゐる間は早く進み戀人を待つてゐる間はのろく進むさうだ）
或は又
本能のおもむく儘の生活
美的生活。
之を裏付けるものゝ眞劍さに依つて
軍配はあげられる。

やつぱり精神だ。
そして之を形成する身體だ。
そこにスツクと巨人は立つ。
概念のみでは駄目。
息が一體そこに通（カヨ）つてゐるか?!

――一九二六、一二、一八夜半――

ひどい風が吹きやがらア。

俺の生活態度を
不眞面目なりとなすは
誰だ。
然り俺もさう思ふ。

一體世の中に
本當に眞面目な
生活を送つてゐるのが
一人でもあるか。
勿論それは俺の不眞面目で
あることの理由にも

ならぬし、
口譯にもならぬが、

酒呑みは嫌だつて
野暮な事を云ふない。

梅　雨

六月五日（日曜）雨

あさの間、手紙一通、葉書四通を認む。
午後本郷座に友右衛門後援の總見に加る。
お染久松と牡丹燈籠、福助の鏡獅子。
赤坂の春香亭の一門と舊交（但し一回）を暖む。女一人に男一人なれば大膽に行けば相當やれ

（一九二六年十二月十九日）

るものなりとの自信出來たり。顏の荒れてゐるのには少し愛想が盡きる。秀千代と云ふのは太肉で艶々と肥えて一寸よろし。

六　日

猥本を役所から歸つて讀み續く。
一體接吻（キッス）をしてゐるのにすや〳〵と寢てゐて一寸眼を醒さぬ女があるものだらうか?!
平和への信頼破れて
乙女心躍る。

七　日

築地小劇場にイブセンの「鴨」を見る。

八　日

ひる如水會館にブルニエーと佛語を語る。

晶子調か否かを知らず。

いと脆き玻璃の器に似るものを
あら〳〵しくも觸れ給ふかな。

九　日

中勘助「銀之匙」前篇語る——。
Guy de Maupassant; Notre Coeur 求む。

十　日

赤坂、支那料理もみぢに金子事務官の招待會に列す。鱈腹のみ食ふ。
流し眼の包圍攻撃（少し大袈裟だが）
一つの試み、舌の感觸！
弱きものよ汝の名は女なり。人間なり。
いくらでも出すから驚く。

そして言ひ草が
隨分ひどい。このお人はッ
だから驚く。そして思ひ切りおれを抓(ツネ)つたつけ。あとで一寸居直られたのに一寸ドギマギした。
とにかくも無事に歸る。
赤坂つて處は一體に甘い處だつて——。一寸見識ばつたぼたんの艶態も弱目につけ目だそつと
手を握つてやつたらニコ〳〵して默つて居たつけ。併しその手の感觸の馬鹿に冷たかつたのには
やはり藝者だけあるなと感心した。やつれが眼につく。ともかくに荒れた嫁業だ。病氣もあらう。
それに俺としても金がない。この二つが——そしてこの二つのみが、俺にスタートを逡巡させる。
變つたりな！

十一日

朝風呂、班痕をつけやがつた。二の腕と太もゝに。ひどい贈り物だ。併しその狂亂に似たある
ものゝ追憶は愛すべきだ。
夜一友と白山を歩く。

（一九二七年六月二五日）

暑中御見舞

暑い！　暑い！
みなさんお變りありませんか。
御無沙汰致しております。

この一ヶ月程すつかり「生活らしい生活」をせなかつた。
新島司税官の送別會が終つた、東京驛と上野驛へ一々送りに行つた。
おやぢから早く嫁を貰へと云つて來る。
本郷に巣食ふ、バチョラー、クラブの連中が、押しかけて來る、そして燕樂でビールを飲む。
岩波文庫「春の眼醒め」「病床六尺」を讀み足す。
役所では貿易概覽の校正の仕事が始まる。

いや、とつても暑い事だ。
芥川が死ぬ。
半七捕物帳を讀む。
逗子へ一度泳ぎに行く。
關税課長がかはる。
何から何まで、暑い。

今日は午後一時如水會館。
午睡約一時間半。
讀書、芥川、「文藝的な、あまりに文藝的な、」「西方の人」何れも改造八月所載。
徒歩歸宅。
おやぢへ返事七枚の長信。

まいあさ、朝風呂。

これの效果については疑義がある。
徒歩役所行半時間、この頃は汗がにじんで痛い。

二十日頃歸淡一週間の豫定。
少し元氣になる必要がある。
或程度迄チヤランポランたれ！

（一九二七年六月二五日）

一九二八年

雀の聲と共に新玉の年は風も搖がず枝も鳴らさぬ平和の中に明けはなれた。
年頭の感と云ふ樣なものが年一年と薄れて行くやうなのは事實だ。
自然に驚異せなくなると同時に規範や形式にも鈍感になるのであらう。
三つ子の魂百までと云ふことがある。

二十八になつてもあまり飛び離れて偉くなりそうもない。
何かでかい事件でも起らないと凡人の神經は精錬さるゝよすがを持たぬのであらう。
あまり變らぬと云ふのは順境にゐると云ふ證據だとしたらあまり惡いことでもあるまい。
島の正月は極めて平和だ、
これからモーニングを着て一廻り年始の禮に廻つて來るとしやう。
折角持つてかへつた新調のモーニングだから。
何も大して書くこともなささうだ。
だん〳〵アンビシアスでなくなるのはどうしたことだらう、一寸淋しい氣もする。
自己分裂と云ふやうな現象かも知れぬ。
鈍感と鋭敏と。
萬葉集の相聞の歌と
芥川の作品と、湖南の扇、支那遊記
一は根强くて眞摯な情熱と
他は鋭い尖つた感受性の强い神經のおの〻きと、二つながらに得難い作物だと思ふ。

二十九日神戸、三十日未明歸淡

食つて寢て、寢て食つて、腹の調子が一寸變だ、これから腹こなしに一寸出掛けるとしやう。

近所や親類や八幡さんや、伊勢の森の氏神へも詣つて來やう。父の命令もあることだから。

（一、一午前記）

更正の道を歩め

彼女の接吻。
甘くして
我が髓を震蕩せしむ。

人世の苦を一身に
負ふとは云へ。

失はぬ純眞のひらめき。

いぢらしくも
顚倒せる心。
一日有半。

別れ來しより
我が心のいたみ
しみ〴〵と滿身に泌み渡る。

榮譽、世間體
すべての儚なさ
短かき日の體驗は語る。

あはれなるは
女の情
諸々の羈伴よろしく之に依つて斷つべし。
天下の權、曠古の偉業。
先づ戀を得て
然るのちなるべし。

戀の法悅。
情の恍惚にひたる！
向ふ見ずの强さをわれは禮讃す。

而して去つては
沈潛、精勵、研學、
快活、愛撫、公平、

而して常に臍下丹田には力をたゝえよ。

山口兄に

倫敦土產のネクタイ有難う。
とてもいゝ柄だと、
澤山の人がほめて呉れた。

それから、
御結婚お芽出度う。
しつかりたのむ。

それが重荷に、

ならぬ様に
萬事フリーに相變らずやつて呉れ。

北海道への赴任の
道程のはじまり。
母と共に京都を過ぐる汽車の中だ。
よかつたら夏には來て呉れ。

淺村兄に

お祖母様がなくなられた由
謹んでお悔み申し上げる。
淋しくなつてみんな

——一九二八、一、二四——

お心おとしのおん事と拜察する。

こん度小樽稅務署へ行く事となつた。
一度お會ひしたかつたが
ゆつくりした時間を持たなかつたので
失敬した。
初めての土地だ、しかも寒さの最中だ。
しかも意氣は軒昂の方だ。
何も若い間の事だ
北海道を荒しまはつて來る
遺憾なく搔きまわして來てやる。
九月頃には歸省する、では御元氣で。

（一九二八、一、二四、大津）

燒芋の成功

○序　言

「本郷の眞ん中にて」（一九二七年一月以降）
「暫らく平凡人たれ」（一九二七年四月上旬以降）
「靜觀の秋」（昭和二年九月下旬）
「雪中の快味」（小樽日記第一冊昭和三年一月廿八日起）
これは私の日記の表題です。

○人　妻

結婚リーグでもあるまいに、みんな妻君を貰ふこと〳〵。僕も母を一昨日函館まで送つて來て昨夜は廣い家に（一人としては廣いやねー、即ち八、六、六、三、臺所、廊下、床（トコ）の間と來てい

らア）一人で寢たわけだ。女中さん、と云つても良家の夫人で奇麗な人妻だ勿論三十臺、は朝早く來て朝飯のしたく其の他、夜は七時か八時に歸つて行く。昨夜は久し振りに本箱の整理、大分勉强が出來さうな氣になつた。

ところが十一時ひとりで寢床に潜り込むときは一寸淋しかつた。妻帶者（普通、家を持つてゐると云ふ）である東京のある友が羨ましかつた。

夜中惡夢を見る、**バン**なればスキート、ドリームと云ふところだ。

秋まで獨身が持てるかどうかを一寸疑ふ。

○物　其　自　體

稅務署の僕の室の窓越しに若い女がよく通るのが見える。硝子が曇つてゐたので小使頭に拭かせた。小使頭と云ふのは今度昇給して日給一圓六十錢になつた男である。長男は中學校の三年になり、次女は今度女學校へ入つた。雪國の女は色彩のはつきりした、端的に云へば原色の着物を着る。角卷（カクマキ）をまとふ。冬はそれが白雪に反映してこれにくるまつてゐる物其自體を引きたゝせる。雪が解けると盆と正月とが一時に來る（因みに云ふ解けかけると早いものだ、小樽の大通は大方

乾いた。砂埃りの走りが、數日前から立つてゐる。)女は綺羅を飾つて街頭に出る。街は人で一杯だ、隨つて女で一杯だ。眼まぐるしい光と色の交錯である。それを僕はこれから夏にかけて(瓜島と云ふところは海水浴でとても賑はふさうである、逗子、葉山には及ばずとも、洲本の素朴はなくともモダーンな點は豫想外であるべく豫想される。)かゝる自然をも享樂せんとするものである。

○熊　祭　り

アイヌの熊祭り。

舊取引所跡で行はれるそれを彼はこれから見に行かうとしてゐるのである。

○本　論

これだけ書いてお茶を濁せること其自體がやきいもをして今日の成功を贏ち得しめた所以である。

この十日程しきりに燒芋の心安さを思ふ。

(昭和三、四、三、神武天皇祭)

朝陽より

山口君を偲ぶ

死!!　死!!

死の手は一人の若者を掴んだ。

若者、それは頑丈な體格、

高い脊丈、隆々たる筋骨、太くて力强い聲の所有者だつた。

暗示に富んだ眼元、親しみの

滿ちた微笑、悠然と落着いた歩み。

其等は全て若者を特徴づけた。

若者は白虎隊を產んだ會津に育ち、擊劍に堪能だつた。
あゝそれも夢だ。
若者は立派な人格、洒脫な氣風を持つてゐた。
落付いた奧床しい空氣が、常に彼の周圍にあつた。
あゝそれも夢だ。
死の魔手は若者を容赦なく、浚つて行つた。

× × ×

あゝ山口佐治雄君
君も宿命論者だつたのだ。
君はちやんと君の運命を知つてゐた。
淸い氣高い君には此世は餘りに汚れ、且暗かつた。
君は大急ぎで天國へ去つた。
僕は或日君の頑丈な體格を褒めた事がある。
立派なからだゞね。

君は靜かな、懷しい、けれども、
なんだか暗い顏付をして、そして、淋しい微笑を浮べて
いやあんまり强くない。
それは圖書館で、君と僕との間に、低聲で交された簡單な、併し、
印象の深い會話なのだ。
あゝ山口佐治雄君
君は遂に僕等から去つた。永久に、
併し、君の回憶は僕等の心から去るまい、永久に
君を育くんだ懷しい故鄕の土に
君よ、安らかに眠れ。

——大正十年四月——

磊落な性格

大正十一年一月十四日は井上兼夫君の永眠の日であつた。二年前の同じ月同じ日には私は君が永眠された東京病院の別區に、やはり窒扶斯で横はつてゐた。この事實は、私の井上君の死に對する感慨と印象とを一層深くする。

君の磊落な性格は、君と少しでも話をした人には快よい印象を與へないでは置かなかつた。君はよく呵々大笑した。その眼鏡越しの笑顔と高い調子の笑ひ聲とには、清純な無邪氣さがあり屈托のない玲瓏さがあつた。君は少し呼吸器が弱かつたらしい。

「此頃カルシユームの注射をやつてゐる。」

或日やはり笑ひながら私に斯ふ云つた事を覺えてゐる。

君の性格には磊落なる反面に力强き眞面目さを認める事が出來た。あの何時かの讀書會でゼレンケエルケゴールの話をして呉れた時の熱心さ、それから集つてゐる連中を抱腹せしめた無言劇も一挿話として思ひ出す。

竹を割つた樣な、すぐな氣質、秋の空の樣に清い性格の所有者たりし君の死は返すがへすも惜しい。豈、たゞに朝陽の打擊のみならんや、正しく日本の損失である。

君を偲ぶ事のみが私達に殘されてゐる。そして君の追憶は常に私達の心を清めて呉れるであらう。

君の靈よ。願はくば安らかなれ。

大阪八聯隊から

在營三日餘にして今日の午飯（四分六の麥飯）は之を全部平らぐるを得たり。

二年兵も親切だ、今の內だけかも知れぬ、渡る世間に鬼はなしだ乍併、昨日の夕飯には馬肉を食はされた。

手の皮が大分あつくなつた。

所謂「要領」の片影がうかゞはれる。

腦脊髓膜炎の豫防注射をうけたので明朝まで二十四時間休みだ、酒保行まだ駄目、大して食ひたくもなし、中々、いゝ所がある、同室志願兵十九名、旣に仲よくなる主計にあらず、本科なりそれも又よしか、その內に弱音も吹く健在なれ。

兵營通信

大正十五年一月十八日

○ 兵營と云ふ別世界に兵隊さんの生活を營むこと既に五十日、勉强はせなかつたが、新らしい經驗は色々だ、樂天的な自分に取つてはそれでも新生活に對する好奇心がざらにある。嫌なことと苦しいことを征服してともかくも今日まで歩み來つた。

○ 武力を中心とする大きな團結だ、人のなさけはそれでもこの殺風景な兵營生活にも織り込まれてうれしい思ひ出も少からずある。

○ 班友十九名、それに班長、教官、中隊長、更らに大隊長、遠く聯隊長、班では皆無邪氣に食(クヒ)氣と色氣の話ばかりがよくはずむ、まづ稚氣滿々で段々親しさが增して來る。

○ 日曜の外出は何と云つても樂しみだ、松竹座へよく行く、洋食や支那料理もかゝさぬ。そして身體はまづ頑健だ。

生活の中心

生活の中心といふ事を考へて見る。

阿部次郎さんだかゞ言つた樣に、學生時代に於ける生活の中心はなんと言つても學校そのものであらう。更にその內容を私の經驗によつて細別すると小學校時代に於ける私の生活の中心は中學入學の受驗勉强であり、中學校時代に於けるそれは高等學校入學（それは私の中學卒業まぎは迄の志望であつた。）の受驗勉强だつた。——我が國の教育制度に禍あれ、——と要言する事が出來るやうだ。處が一橋に於ける我が生活の中心はその後半本科時代に關しては——更に正確に言へば本科の最初の二年に關しては——高田保馬博士の社會學だと云ふ事が出來よう、最後の一年は高文受驗に之を求める事が出來るかもしれない。乍併豫科三年間の空隙(ペイカンシー)を塡め、更らに本科三年間の背景を彩るものグループ朝陽のあつた事を忘れてはならない。

角帽が脊廣に變つて八ヶ月、稅關事務官補兼大藏屬としての私の生活の中心は飜譯の二字にコ

ンデンスされる様だ。

さて然らば舊職入營後正に五ケ月何を以つて私の生活の中心なりとするか、如上の論法を以つてすれば兵營生活の中心は教練なりとでも云ふ事が出來よう。茲に生活の中心の質的變化——知的なるものより肉體的なるものへの——がみとめられる。この壓倒的な變化の下に新生活のぎこちなさを感じ、その精神上所謂軍隊呆けの症狀を來すのは又止むを得ざる事と云へやう。

話は少し岐路にはいつた様だが結局私のこの小文で云はんと欲することは以上假りに私の例によつて羅列した様な生活の中心なるものは、すべて外面的な生活の中心であつて、眞の意味に於ける生活の中心はもつと根本的な一貫せるサムシングに之を求めなければならないと云ふことである。而してそのサムシングが如何なる信仰であり、如何なる悟りであるかに就いて私はもつと沈潛して考へたいと思つてゐる。

（大正十五年）

兵營隨筆

○

今晩六時出發、夜行軍八里の道を突破して岸和田を經て信太山に向はんとする。

班友十七名、許されたる午後四時までの午睡を殘りなく享樂すべく六尺の身體を寢床上に横へて皆寢相も温和しく寢顔も平和だ。

今度は第二期檢閲と云ふのを受けに行くのだ、信太山舍滞在八日間、晦日に歸營すると云ふのだから暑熱と困苦と可成の努力が入用だ。

朝陽の原稿もこの一時間に書き飛ばされなければ締切の二十五日に間に合はぬと云ふわけだ。

○

事件のあるピリヨツドは當時にあつては、その過ぎ行く事極めて早いが、後から回顧すると可成その期間は長い様に思はれる。

反之、事件のないピリヨツドは當時にあつては、その過ぎ行く事極めて鈍いが後から回顧すると可成その期間は早く過ぎ去つた様に思はれる。

これは誰かの言葉ださうな。

兵營生活八ケ月、その眞なるを痛感する。

○

この頃もう夜が大分長くなつて來た。嘗つては四時頃にもう明るかつた空がこの頃では五時の起床時にはまだ何處となくはつきりせぬ今に秋の長い夜がやつて來る事だらう。そしたら滿期の日も近づいて來る。それはうれしい事だ。併しそのうれしさにも增して月日の早く立つのを惜しむ心が我が胸に强く動くのは何としたことだらう。この氣持はこの頃に初まらぬ。閏年の二月に二十九日あるのをホッとした氣持で恰も一日命が延びた樣に嬉しく思ふのは物心ついてからの我が慣例の樣だ。

私はこの事を、未だ失はれぬ我が若き心の表現と見る。

○

泣くべきか、笑ふべきか
これは喜劇である。
あの女か、この女か
これも喜劇である。
生か、死か

これは悲劇である。
第一義の活動は茲に生れる。
何でも漱石はこんな言葉を云つた、この頃たまさか思ひ出す言葉である。

○

この頃の讀み物

蘇峯　大日本國民史
實篤　論語の講義
白秋　白秋詩歌選
百三　赤い靈魂　なんど

○

出陣の時刻迫る。同人諸兄の御勇健ならんことを祈りてペンを擱く。

（大正十五、七、二三、午後四時、大阪歩兵第八聯隊兵舍に於て）

三冊の日記帳より

○

四月二十一日 風後雨

須らくオプソレツトなる事物より去るべし。
知らんと欲することの何ぞ多き
俗事にこだわるべからず
道草をすべからず。
我が心と身を肥さんが爲に。
あゝ我れ蘇らん哉
焦燥の心もよろし
されど何よりも大切なるは精進の心

本當の凡人たることに充實せよ
やがて偉大なる凡人たらんが爲に
而して遂に偉大なる偉人たらんが爲に。

○

七月十二日

二進も三進も動けなくなるのは厭だ
彈力性それを私は要求する
硬化するのはよくないことだ
それに私はあまり強くない
愛の鎖は人を色盲にする
あまりしばられぬがいゝ
そんな短兵急はいやだ
頑固なのもいやだ
……

九月二十八日

○

「靜觀の秋」の解

顧みればあはたゞしくもすぎた此の三「四半期」であつた。其の雜駁で、斷片的で、落ちつきのなかつた點は全く驚嘆に値する。

「本郷の眞中にて」「暫く平凡人たれ」、を透してそこに何等かの一貫性を思はする何物かゞあるか。世界は動く、變革する、發展する。世界を形成する總ての分子は大なるもの、更にその內の小なるもの、總て搖ぎ、結合し、分離し、進化し、さては其の影響を總體に及ぼしてゐる。

然り而して獨り我れのみは浮草の如く妄動する。その是なる所以を知らぬ。人は人生を生きなくてはならぬ。それには先づ事物を、而して我が心を靜觀しなくてはならぬ。

——二、一〇、四、夜淸書——

稅務署長時代

北海道瞥見記

七月四日の朝小樽を立つて十二日夜に歸へる。同行池田函館稅務署長。この九日間に河西、根室、釧路、網走、名寄、上川、瀧川、室蘭の八稅務署を視察し、稅務一般打合を了し、稗益する所甚大であつたのは申す迄もないが、細かい難しい話は暫く云はず、このあわたゞしい旅に依つて瞥見された北海の姿を忘れぬうちに大摑みに覺え書的に書き殘すと共に、我等に寄せて頂いた各地各位の御歡待を併せてこの間に於て偲ぶよすがとしたいのが本文を綴つた所以である。

○旅は道連れ世は情

小樽署管内の税務協議會のあと、低廉にして同時に充實せる宴會で、税務主任連の氣をよくして、夫々歸へらしたのは前晩の話。今日は二年の宿望の初めて達する日と云ふので、五時には元氣よく起きる。七時十二分南小樽發札幌驛では新署長が態々「御機嫌よう」と聲をかけに來て吳れる。

池田（これから敬稱官職名を省略する）の注文で、携帶用折りたゝみ碁盤を小樽で買つて乘り込んだが、第一戰で名を成した敵は前夜のつかれか横になつて寢込む。瀧川着、プラツトホームに下りて見る。鐵道の分岐點であるだけ、驛構内は貨客とも輻輳中々活氣がある。今度の旅行日程は小樽で作つた。先づ最初に「北海道らしさ」に觸れたいために、帶廣、根室を先にした次第だ。この日曇天、汽車の進むにつれて細い雨さへ降り出した。下富良野の辨當が美味かつたあと第二回戰で敵討をやつて大いに氣をよくした頃、汽車は狩勝峠にかゝたが不相變細雨と云ふのか濃霧と云ふのかゞかゝつて、百間先は見えわかぬ。即ち狩勝平原の大觀は又の日に割愛する。新得で本莊河西署長の出迎へを受けて恐縮する。清水驛下車、明治製糖の荒木氏の御案内で、工場

内を參觀する。夏分は原料がないので機械は動かぬが、技師の委しい説明で甜菜製糖工程の大體を呑み込む。百聞は一見に如かず。雨の中を甜菜畑の間を通つて會社のクラブに落ち付く。十時前第一夜の圓らかな夢に入る。

○十勝の平原、市街と水田

七月五日（第二日）

黎明五時清水發。帶廣着六時。本野、山本、石田三課長の出迎へ——驛前待合で一憩、朝食。自動車で止若の新田ベニヤ工場迄飛ばす。見學三十分間で岩田營業部長は要領よく案内して吳れる。汽車で帶廣へ歸へる。税務署は街の北端近くにある。道路は井然廣々としてアカシヤの並樹は新興の町に相應しい。この日快晴盛夏の前衞を思はす暑氣。奥野農會長が同鄉の人なので一寸訪問敬意を表する。共進會に用意したと思はれるパンフレツトや、十勝全圖や、繪葉書澤山、河西支廳と町役場からもらつたのをかゝへて、午後零時三十六分發の汽車に乘る。

車窓より眺むる十勝の平原。國の中央を貫流する十勝川の水勢。その流域に開拓される農耕適地——水田と畑、十勝馬の勇躍する牧場。音更の大藏省主管地も程遠くはないが、時間がないの

で割愛する。十弗（トウフツ）すぎ、下頃部（シタコロベ）すぎ、さては大樂毛（オホタノシゲ）など變つた名前もあるものかな。釧路の驛辨の不味いのに憤慨する頃には、特有の濃霧に日も暮れ初める。

全國に散らばる同僚へ池田と寄せ書。千古斧鉞を入れぬ原始林、寸前咫尺を辨ぜぬ濃霧、などゝ云ふ文句が盛んにつかはれる。日は暮れて、汽車は根室の國に入る。同室には二人きり、千島灣流の影響か冷氣身に泌む。克明に止つてゆく寒驛のランプの光と柱時計に何となき哀愁。十時根室着。渡部署長、南部税關支署長、澤井關税課長の出迎で、二美喜旅館へ自動車は暗い街を走つた。

○根室、釧路は濃霧の國

七月六日、旅行第三日は北海の東端根室の國に眼を醒ましたのに初まる。前夜深更まで、根室の話を大分聞いた。流氷の話、昆布と鮪の話、濃霧の話、國後爺々山絶勝の話、色丹島土人の話人情濃かなる話、盆踊に角巻を着て見に行く話、馬に乘つて擇捉島を縱破する話、三品安値の話二時半にほの〴〵と夜があけかゝる話、等々。朝來、枕上の硝子障子ががたがたと鳴つて、風狀

只ならざるを思はせたが、飛起き根室灣頭に眼をやれば、濃霧の去來しきり、障子を排すれば、寒い霧がサツと座敷に流れ込む。女中にきけば風が強いのは何時ものことだと云ふ。

渡部署長、税關支署長、署員各位のお出迎を受けて、税關から徒歩、花咲町を税務署に向ふ。道路は區劃井然、道に兼古酒造場を訪ひ敬意を表する。税務署は高燥の地にあつて眺望がよい。署内の整頓も結構な樣に見受けられた。汽車は午後一時二十分に發車する。立つ前あちこちへ出狀、本道最東端に於ける、我等がかりそめの存在を明かにする。

俗謠に、

帶も十勝にその儘根室落石涙は幌泉

と云ふのがあるとか、その落石と云ふ驛まで御見送を忝うしてから二人の旅は再び續けられた。鳥鷺第三回戰、たしか小生の勝。ガスの中、厚岸の勝景も見えわかず、ウト〳〵してゐる中に釧路に着いた。細川署長出局留守、吉川、菅原、狩野三課長村岡税關支署長のお出迎へ、先づ日沒前に税關支署へ車を飛ばす。如何にも港町の感がする。小樽と共通な何物かゞ漾つてゐる街だ。釧路川切換工事、釧路港の修築事業、即ちその浚渫と築堤工事の大要を聽く。高臺に上り、市上眺望。

税務署行は明日の事として、東北海道の首都としての釧路の使命、扨ては橋南橋北の功過如何等々をあげつらひつゝ、角大旅館に旅寢の枕についたのは大分夜も更けてゐたらう。

○北見國野付牛網走まで

七月七日、第四日。釧路では珍らしい好天氣。八時旅館を出で、眞砂町から浦見町税務署一瞥。釧路川を渡つて、西幣舞町。午前九時五分發の汽車に間に合はすと云ふ忙しさ。春採湖も阿寒湖も税務打合せには關係少なきを以つて割愛。

大樂毛の馬市や白糠のアイヌ部落もすぎて、池田で乘換へ、一憩。利別川に沿ふて、今夜の宿泊地野付牛への長い汽車の旅。置戸から北見に入る。相當な水田だとたゝえてゐる内に野付牛着。服部署長のお出迎へ。間もなく日が暮れて涼風に元氣漸く回復。宿屋では新鮮なトマトが出た、即ち一献を重ね陶然となる。夜、町の見學、おそろしく廣々とした町で、驛前にはデパートもある。有名な梅の家をも覗く。人口二萬八千。

明くれば八日(第五日)、日程は丁度半ば。午前六時野付牛發、美幌、女滿別を經て網走着同八時。竹内、佐藤、奥村の三課長に會ふ。三眺山に登り、オホーツク海、能取湖、網走湖の三眺を擅にする。恨むらくは、第一者は霧のため僅かに想望するにとゞまりしを。歸途有名なる刑務所見學、仲々立派な建物で、設備もよく整ひ淸潔、採光通風もよく、食物も營養的だ。五〇〇人の囚人中、無期徒刑が五〇人ゐると聞いた。二人づゝ鎖につながれて耕耘するのを、所前の水田中に親しく見た。

港の説明を築港事務所できゝ、税務署で晝飯の御馳走になる。明るい、いゝ廳舍だ。桂ヶ間公園を經て驛に出る。空は漸く曇り初めて、午後二時三十二分汽車が動き出す。プラットホームに佇む見送の人々の白ズボンが、かすかに霧の中に消えて行つた。

留邊蘂、遠輕、中湧別など、新聞で時折見る名が驛名札にあらはれる。うれしい旅の心だ。オホーツク海は曇天のため遂に見參の光榮を得なかつた。名寄着十一時半、富士見ホテルで風呂に入ると急に元氣がよくなつた。

○名寄、旭川の酒屋見學、瀧川の一瞥

七月九日(第六日)。名寄の朝は素晴らしい快晴の初夏だ。税務署は前に廣い道路後には晴々とした畑、氣持のいゝ廳舍ではある。工藤署長、田村關税課長の御案内で合同酒精工場見學、造石

高一萬石。お恥かしい次第だが小生としては初めて見る燒酎工場だ。所謂ゴードーの一餐にしばし暑氣を忘れたあと、後〇時四十分あわたゞしい別れを、明るい夏の町に告げる。士別の開墾地和寒の除虫菊畑を美しと見てゐる内に旭川着。寺井署長、梅田、山田、山根三課長のお出迎へに感謝しながら、直ちに、合同酒精行、工場一覽後柳田常務取締役、寺井署長、關稅課長と同道、自動車で練兵場、師團、近文土人部落をめぐる。この夜は北海ホテルのダブルベッドに廣々と寢た

明くれば十日、先づ稅務署に寄つて、敬意を表し、主だつた署員の方々に會ふ。こゝ流石に多士齋々の樣に見受けられた。そのあと野口、世木澤、日本清酒第一工場、小檜山の各酒造場を歷訪する。何と云つても本道銘釀地の屈指、工場規模の雄大、技術の發達、主人杜氏の研究的態度何れも間然する所なしときいたに違はないのを心强く思つた。殊に小檜山氏の新築釀造工場に至つては、行人の眼を聳てしむるに足るのみならず、我酒造界に於ける劃紀元的な雄大な企てゞあらう。こゝで汽車を一つ遲らせて、その間に上川、函館、小樽の烏鷺リーグ戰、一勝一敗の循環的戰績。三市とも異議なし〳〵で、午後三時二十分の汽車に辛うじて間に合ふ。

瀧川着五時、稅務署行。鈴木署長初め深山、佐藤、比内三課長に會ふ。流石モダーン新廳舍は立派である。階段の未來派的なのやら、便利に出來た倉庫など、殊に眼立つて見えた。鈴木署長

は極めて要領よく町中を引き廻はして呉れた。

○苫小牧と室蘭の視察

旅は漸く終末に近づく。十一日（第八日）午前十一時過、汽車は苫小牧に間近い。同じ車の中には岡田嘉子とその愛人竹内良一及び後者の妹さんが乘り合せて居る。今宵は室蘭で一座の興行が開かれるのであらう。

苫小牧下車。物應署長の御斡旋で直ちに王子製紙支社の倶樂部に赴く。支社の幹部總出で御歡待を忝うする。何れもスマートな練達な實業家揃ひだ。洋食の午餐四方山の話。

次に見學、本道重要工業の隨一とは云へ、さてもでかく大きい工場の風情よな。丸太が午勞の樣に取扱はれる、切斷される、皮が剝がれる、削られる、やがてパルプの山、次の部屋には新聞用紙のロールがごろ〳〵と轉つてゐる。大規模生産の好模型。本邦に於ける新聞用紙の半はこの工場で生産されるとか、主として東日及大毎へ供給すると云ふ。

苫小牧發午後三時五分——室蘭着後六時十四分。池田兼任稅關事務官は一寸稅關支署へ顏を出す。そのお供。宿は丸本創成館支店、部屋から「水深く波靜かなる港灣」が一目に見下される。

されど日は暮れて、蒼ずんだ空の色、蜥蜴の様な石炭棧橋、宿の前を通る出面歸りの女工夫の群れ、陰慘な港町の夕の風情に變りはない。即ち浴衣がけで高臺へと出掛ける。この夜晩く迄、物應署長との物語がはずんだ。

七月十二日(第九日)、最後の日。

日本製鋼所室蘭工場見學。池田の岳父が嘗つて茲に重役たりし緣故で、朝まだき自動車が差し廻される。重役連との挨拶、丁寧な御案内。熔鑛爐から流れ出る灼熱せる熔鐵、赤い鐵の大塊を壓搾する巨大なる裝置。火花が散る、穿孔機が廻る、鐵板を打つ音、等々。稅務署に寄る。素晴らしい眺望だ。

遮莫、歸りは急がれる。驛頭に於ける物應署長との別れ——。

× × ×

かくて十勝の平原に初まり、製鋼所の熔鑛爐を打止めとして、九日の旅の追憶は、長輪線の人となつた二人の間に、噴火灣の勝景を前にして次々とはてしなく繰り擴げられた。

——一九二九——(完) (北海財務所蔵)

酒の味

私は稅界に入つて實際酒造の取締、監督、課稅並に稅源涵養の意味合から品質改善、增石を奬勵する立場にあるが私がこの世に生を享けた時から酒の香が附いて居る、それは母親の生家は小さな酒屋である、未だに子供時代のヒネリ餅と酒粕の味は忘れない。

酒の味は未だ充分判らんが飲めば可成やれる、けれども飲み過ぎた時は翌日頭が痛い。

只これだけは云へる、自分の體に適量の酒が入つたときはなんとなく嬉しい氣分になる、友人等と膝を交えて飲むときは全く愉快だ、こんなことから花見酒、月見酒、雪見酒も淺酌低唱、差し向いの晩酌、寢酒の一本といふ佳趣も出て來るのだらうと思ふ、萬葉集の酒の歌、大町桂月の讃酒論も面白いと思ふ。

酒は寒中威勢のいゝ若衆が酒屋唄を歌ひ乍ら醸したものを春の初めに火入貯藏して土用一杯を暮して芳醇掬すべきお酒となる。

酒と熱

酒は全くいゝ、度々來客が見えても又東京などへお土産物にしても實にいゝ酒だと喜ばれる。

酒は取扱ひ方で大分お美味く飲ませられるときと不味いときもあるが關西では樽圍、冷下しと云つて菰冠りになつて出て居るが、飲んで木香のあるのもどこやらいゝ。

樽もいゝものだと拾貳參圓もするとか成程と點頭かれる。

又お燗も上戸の方は熱燗と云つてフーフー吹いて飲んでるやうだが、酒質によつてお燗の程度もあるだらう。

燗徳利や盃の質、形、大小の味覺に影響あるだらう、造る事も寸時も注意を怠ることは出來ないが旨く飲ませることも必然ではないでせうか。

新酒造期に入つて酒の身の上を考へて見ました。

（一九三〇、醸造新聞所載）

私は未だ自宅では定規的な晩酌はやらない。併し酒の飲めゐ友人、もつと正確に云へば酒好きな友人が來訪された場合には一献を勧める。

ビールは手つ取り早いが親しみがうすい。久濶を敍し泌々した人間味の交流を見るのは獻酬の味だ。

出張した場合など伴侶ありて飲むのはうれしい、一人ではどうもほど〳〵に飲んで陶然と醉ひ安然と眠る。

正に太平の逸民たるに甘んじながら。

管外に出張したときなども毎夜の宿毎にその土地々々の地酒を一二本愛玩するのは何よりの樂しみだ。土地の酒がなくて灘物だとか、九州くんだりからの萬代だなどゝ聞かされると興ざめる

ひゐき目かは知らぬが秋田銘酒は何處で飲んでもいゝ。各地で私はかなり秋田銘酒を宣傳して廻つてゐる筈だ。

東京、神戸、淡路へ行くときにはいつも秋田の酒を持つて歸る。

話は脇道へそれるが、北海道の酒も中々よく親しみを覺える。前任地の關係だらう。もう一つ同地の酒屋さんには東北の酒造家に負けぬ程度の熱がある。

酒造業經營をその技術方面何れにも熱は必要である。

（一九三〇、釀造新聞所載）

秋田を顧みて

朗かな旅、若人は夏の陽ざしを浴びながら羽後の國の豐饒な野を走る車窓に獨り未知の新生活に對する漠然とした豫感に涵つてゐた。長い巡錫の旅の第二驛――秋田――が近い。

夏の夜は灰色に明け易い。千秋公園の夜の色濃き繁み、八橋の杜の月明かなる靜寂、自然と人生との奇しき融合、神秘に夜は明けて税務署の椅子の坐り心地は果して如何。

この先つがた次々と我が腦裏に繰り擴げられる夢繪卷のクローズアップはかすかす多い。

遮莫、秋田の土と人、一年九ヶ月の生活に觸れた豐かな土の香と暖い人の心の感觸は芳ばしくも亦快い。米産は饒かに暮しは派手に人情は素朴で敦厚だ。秋田辯とその地方色、都鄙を通じての原始的な微笑ましさ。縣人は傳統を重んじ、お國自慢で頑固なところがあり、相當の感情家だ酒は飲む、そして飲めば朗かだ。秋田美人は此國の誇であり川反は土地の名所である。

税務署内の結束は緊密で春風駘蕩たる平和が常に茲に君臨してゐた。對外的にも先づ異變がなかつた税務署の地位はかなり高い。之は前任鈴木署長の努力がその重きをなす。署長は十五日會の中堅だ。新聞記者は地方と東京とを問はず税務の理解に富み毎日署を訪ふて吳れる。對外的交渉は多い。國有財産特別賣拂三年計畫が初つてゐる。濁酒密造矯正會關係の特別用務がある。さはれ多くの人に接するといふ事は人間の鍛練に役立つ。僕の理性は引込思案に墮し易い僕自身の性格に鞭つて進んで此等の事務に從はしめた。それはまことに好い經驗だつたと思つてゐる。縣廳、檢事局、裁判所、軍隊、營林局、市政關係のからくり、更にその首腦部や幹部連との個人的接觸に依つて教へられるところが多かつた。

在秋中、大官の來駕が可成あつた。大藏省關係では仙臺局の最高幹部は申す迄もなく、銀行檢査官の方々、函館税關長、安江大藏書記官、富田理財局長、小川前政務次官、近くは酒造大會に青木主税局長、矢部技師、釀造試驗所と各監督局の技術官及び黑田前大藏次官等が來秋され何れも親しく咫尺するを得た。尙秋田出身の今を時めくおらが大臣田中文相、町田農相を初めとして安達内相、犬養政友總裁等が次々に來市され其の謦咳に接することを得たのは確かに一種の收穫たるを失はぬ。

秋田へ來て早々、淡路の父を失つたのは悲しい思ひ出である。それは我が生にとりてまことに劃期的な事件であらねばならない。それから同じ年の十一月の末に結婚した。愈々僕もプライムオブ、エイジに達したのだ。

例に依り積極的には外に向つて交遊を求めなかつたが私交では同僚と署員の外は如水會員、近所づきあひには營林局の人々と若手の檢事さん達があつた。人間到處有青山、友人が少いと云ひながらも大して不自由を感じなかつた。東京と關西へは全國署長會議を加へて公私數回出る事が出來、大都會の空氣を吸ふを得た。亡父の一周忌後、母を秋田へ迎へた。

勉强になつたのは署員を集めてやつた財政學の夏期短期講座、扨ては楢山青年團と土崎商業の招聘で辯じた二回の小講演。變つた經驗では一生に三度はするものだと云ふ結婚の媒妁一度、これは昭和五年我歳三十歳の幕の話である。

忘れられぬものでは秋田米の味、名物にうまいものあり、しよつつる、キリタンポ、がつこ、雷魚(はたはた)の小糠漬などは夫々我が同化愛好せるところにかゝる。

其の他秋田名物には蕗と美人と銘酒あり、餘り感心できないのでは火事、密造、大吹雪。とりあげれば色々あらうが此程度で止めよう。

縣内跋渉の回顧は最も快適だ。手近い所から云へば市近郊への日曜の行樂、新屋の濱、土崎の彌六蕃麥、追分の梨、八龍橋から三倉鼻。扨ては自轉車に依る密造取締、一日の行程十五里に及んだことも稀ではない。密造で思ひ出すのは時を異にして行はれた薄暮取締に繫る詩的な二情景だ。一はスキーに依る月夜船岡よりの岩見越えであり、他は河邊郡の僻村種平、戸米川に於ける自轉車隊の活動——それは優に立派な文學的小品に織り込まれるに値する——を僕は一生忘れないであらう。全署員と初夏の日曜を享樂した男鹿半島の探勝、有志と敢行した季節最初の太平山登攀、思ひ出は中々に盡きぬ。

管内二郡四十八町村、足跡の到らざるは邊陬の二、三ケ村のみ。或は土地檢査に、帳簿監督に酒屋廻りに、納稅表彰式に、廢溜池の檢分に農漁村を歩き廻つてその雰圍氣に親んだ。晩春の一日、未明川添村を發して雄物川を下つた風景。緩かな水勢、船内悠々太平の情趣、身自ら往昔支那の逸民たるを感じた。五城目の酒屋さんとは森岳の眺望を擅にし、直稅課長とは男鹿の裏海岸五里を歩いて、烈風と霰に打たれ、關稅の面々とは八郎潟の藻つこの間に扁舟をやつた。或は仁別の美林に營林局の施設を窺ひ、百年の秋田杉が鞏と倒れる現場に深山の秘密を看た。水泳は一

夏、新屋と下濱の河童連に伍して相當活躍した。

私的遍歴――或時は公務の一端を携へての――は更に縣内市邑名所舊蹟を――少し大袈裟だが――網羅した。横手、湯澤、大館、能代、扨ては大曲の花火、拂田柵、象潟の蚶滿寺、田澤湖、抱返りの勝、駒ケ嶽登山。其の他山登りの壓卷では六合目祓川の山小屋で暴風雨に閉ぢ籠められ前後三日間にして漸く遂行した鳥海山踏破の記錄であらう。更に十和田湖に遊ぶこと三回、奥入瀬川の溪流を入れ、青葉と紅葉と、朗晴と陰雨と、其の背景を異にして天下の絶勝を滿喫し東北に在る者の特權を泌々と味了した。

秋田生活と關聯して忘れられぬのはスキーだ。市内外近郊のスキー場は二冬の間に征服し盡したと云ひ得ずんば滑り盡し轉び盡した。金照寺山裏のゲレンデを初めとして、手形山實業スキー大會に於ける二粁ディスタンスレース、寒風山登山、下濱、境、刈和野縱走。同行は或時は署の若人達であり又新聞記者の諸君であり或時は秋田スキークラブの猛者連である。スキー禮讃の言葉は東北稅界、他に人もあらうから茲には敢て述べぬ。

序に秋田縣外、東北各地巡歴の跡を綴つて暫く其の甘美なる回想に耽けることを許され度い。仙臺へは公私用にて行くこと十數回、思ひ出は瑞鳳殿（附、松島）と田村家の集ひと宮古川と都

壽司とに盡きよう。仙臺往復には奥羽本線から横黑線經由の第一路の外、羽越線余目から最上川に沿ふて新庄、小牛田廻りの第二路を愛好した。尙第三路青森を迂回したことも三度に及んだ。温泉では花卷と、淺虫と、蔦と、大鰐と、大湯と、最上高湯と、上之山と、五色と、峨々と――何なら旭川温泉も入れておいてよい――に遊んだ。都市では仙臺の外、山形と、盛岡と、八戸と青森と、弘前と、福島の一瞥と。舊跡では平泉、中尊寺光堂をピカ一とする。再びスキーでは細かいところは省略して、鳴子、大鰐の合宿生活と、五色と、最後は一九三一年一月元日の藏王登山、何れも東北に於ける三役格のスキー場に見參した。先達は田村仙臺、之に續くもの夫々阪田青森、山梨山形、田村、山梨兩夫人、田村の弟君と、殿りが斯く申す小生、――鳴子、大鰐へは我がハーフもお伴した。

大正十四年春、大藏省へ一緒に入つた友人中、財務書記で洋行したのが三人、歸朝後夫々沼津水戸、高崎にゐる。此等の三君が倫敦のハイドパークや紐育のウオール街や巴里のシャンゼリゼで所謂海外の空氣に觸れてゐる間に僕は北海道の鮭漁場を見、秋田の千秋公園の花のトンネルを潜り、鳴子の雪にまみれてゐたわけだ。

北海道一年七ヶ月、それから東北一年九ヶ月半、漸く關東に足を踏み入れた。我が歩みは極め

て小刻で遲々たる感がある。併し今迄の道程が迂回路であつたとは更に思はない。小樽を振出しに秋田、次は宇都宮と我が旅は何處迄續くかは知らぬが現實に滿足して之を生かして粘り强く進んでゆくこと、それが我が念願だ。

秋田に居る間到々北海道へ行く暇がなかつた。宇都宮へ來て秋田、東北へ出向く時は果して何の時ぞ、幸に澤山の友人、知已、後援者を秋田と東北に殘して來た。そして其等の人々を思ふ心は當地に赴任して既に一ヶ月、日々に新たなるものがある。東北の山川を通じて獨り自ら偲ばんが爲にこのペンを採つた所以である。

（昭六、七、一三稿了）

評　論

夏季大學概觀

洲本に初めて開かれた通俗大學會の催しにかゝる夏季大學は聽講生八百名、八月二十一日より三十日迄終始緊張した中に大成功を贏ち得て其の第一回を終つた。

講師の諸先生無慮十有餘人、何れも斯界の權威者、殊にその熱心なる講義振り、蘊蓄を傾けて縷々數萬言、何れも雄辯に且つ通俗にその專門とする所を說かれた御努力に聽講者は皆感動させられた。

三方を開け放したあの武德殿で木の香も新らしい長机、各自の番號札の前に端然と坐して世界の新思潮に聞き入り、學界の新說をノートに書き留めた八百の聽講生の如何に熱心であつた事よ滾々と迸る知識の泉の前に如何に彼等は眞理を知るの法悅に充たされたか、私はそこに永久に伸びんとするものを見、永遠の若者を見た。

八百人の中、百人許りが他府縣の人で殘りは總て兵庫縣下の人であると聞いてゐる、そして後

者の内の大部分は淡路人である、私は茲に於て淡路の文運の爲めに大いに喜ばざるを得ぬ。

私は思ふ、決して淡路人は傳統と舊套にのみ囚へられてはゐない、彼等は知識慾に燃えて居り新說を虛心坦懷に聽き善は採り惡は捨て、而して新時代に順應し、延いては現代を指導して行くだけの若さと元氣とを持つてゐる。

由良志筑假屋福良と淡路全島の隅々から每朝或は自轉車を飛ばし或は汽車を利用して會場に殺到した彼等の意氣込み、殊に聽講者中に白髮交りの老人の多くと、五十名近くの婦人を見出した事は彼等の究學心の旺んなる眞に愉快な事柄であつた。

私はこれから此十日間を振り返つて私自身の立場から全體の講演に渡つて簡單なる摘記と批評とをやつて見たいと思ふ。

勞頭植松醫學博士の「醫學上の男女兩性と最近の社會問題」なる講演を以つて當夏季大學は開かれた。先づ解剖學上より男女兩性を講じ、その間の類似と差異とを明らかにし、轉じて神經作用より男女兩性を見、腦髓に於いて、男は前頭葉發達し女は感情中樞著しく發達せるを指摘し、次に本能的無意識的神經系統と云はるゝ交感神經が女に於いて著しく發達せる事實を擧げて男は理性に生き、女は感情に生くる所以茲に存すと斷じ、結論として男と女とには根本的の差あり、

(少なくとも現在に於いては)この差異を認めて相互に助け合つて行かなければならぬ、この結論が最後に博士獨特の見解の下に社會問題の解決に應用される、即ち男女間の嚴然たる差異を認める事に依りて婦人解放問題を揶揄し女子參政權論を一蹴し、婦人貞操問題に就いては死を堵しても婦人は貞操を守らざるべからずと高調し、轉じて女子職業問題に關しては一般的に之を是認するも女子が政治に携はる事を痛罵し、女子にして政治家たらんとせば先づ卵巢を捨つべしと迄極論された、男女共學及び男女交際問題に關しては大體贊成の樣に見受けたが尙前者に關して共學の結果、やはり女子の方が理解力も記憶力も乏しいと云ふ記錄を附加された、最後に產兒制限論に移り日本國家を以つて鈴成りの電車に比し、一定の限度に於ける產兒制限必要なりと結ばれ尙その制限に當り優生學を考慮すべき事を述べられた。

私は醫學上の問題に關して何等口を挿む事は出來ない、たゞ博士の造詣の深きに敬服するのみである、尙進んでその議論の進み行きの鮮明且つラディカルなる眞に新進學者の俤を見る事が出來る、乍併その結論に至つて果然論語の夫婦別あり長幼序あり式に落ちつくのを見逃してはならない、それは結構だとして此の結論の適用に至つては稍黴臭いものなきにしもあらずである、例へば婦人解放運動を目して男女間の差異を無視せんとせるものなりとなし、或は婦人貞操問題に

於いて男子の不道徳には一言をも及ぼさずして婦人に死を堵しても貞操を守るべき事を要求するが如き共に錯覺的偏狹の言ではなかろうか、殊に女は卵巣を有するが故に政治運動に携るべからずと揚言するが如き共處に明らかな論理の跳躍を見る。

次に本大學最大の暗礁とも云ふべき桑木嚴翼文學博士の「現代哲學思想」に移る、博士は劈頭「經驗世界の根本を掴むが哲學なり」と先づ朴訥連を間誤付かせ、而してそは「一般的知識なるが故にその說多岐也」と前提して、哲學上の二大潮流を形づくる科學的哲學及び感覺の哲學に關し各その代表者たる前者にありてはカント、ヘツケル、後者に在てはベルグソン、ポアンカレーを擧げ、次いで「知識は生活の手段のみ」と叫んで感覺の哲學に挑戰したる「哲學の改造」の著者ジョン、デビーのプラグマチズム（實用哲學）に一瞥を與へ、去つて第三の流れ論理主義の哲學に移り、「物と我との關係が哲學の問題なる」事を看破したるカントの沒すべからざる功績をたゝへ、彼の學說の一般、コペルニクス的轉回、形而上學の否定を解き、更に十九世紀中葉に於る哲學の衰微、一八七〇年代よりの「カントへ返れ」の叫び、而してその後に生れたのが心理學に依り我を說明せんとする心理主義の新カント派、最近に到つては新々カント派現はれ論理主義を標榜してハイデルベルヒの一角に立籠り獨逸西南學派として最近の哲學思潮の牛耳を取るに到る迄の經緯をよく纏めて判りやすく話された、顏面の筋肉一つ動かさず瞬もおろそかにせず少し前の机に身體を倚りかけた不動のポーズで三日間六時間に、滑らかにも是だけ纏めてのお話は博士ならではと思はれた。

法學博士林毅陸氏の三日に亘る「最近の國際政局」に關するお話は又有益なものであつた、外交史の權威者なると共に議政壇場に雄辯を振ふ人だけあつて、複雜なる大戰後の政局を手に取る樣に、又は嚙んで含める樣に聽講生の頭へ叩き込まれた。

先づ大戰後明らかに看取せらるゝ一切の問題の國際化及び外交の民主的支配の傾向を指摘され國際聯盟の意義を闡明し、次に勞働者の勢力の勃興など勞働問題の世界化より國際協力主義の起る所以を說明し、各國に於る法律の社會化に注意を促し、此等の總ての傾向は大戰の慘禍の洗禮を受けたる世界人類が漸く社會的正義に眼覺めたる結果なりとの結論に達したのであつた。

乍併これは大體の傾向であつて尙實際に於いては力は正義なりの思想が國際政治上に有力なる事實を二三例示して高調された後、第二講「不安の國際政局」に入り錯綜せる歐洲政局に關して明快なる說明があつた。

本講演の最後を飾る法學博士牧野英一氏の「權利の觀念の變遷」は當夏季大學數多き講演中の

白眉とも稱すべきものであつた。

博士が法律の社會化を提唱してより既に二十有餘年頑迷固陋なる舊式法學者流の論難攻擊の下に敢然と起ち、自說を飜へさゞる事茲に幾星霜、惡法も又法也の古諺を稱に既に用をなさゞる舊法を墨守し、恬然時勢に逆行せんとせる職々者流の蒙を開くに努力された達識と活眼とに對し吾人は讃嘆を惜しまないものである、遮莫博士の說は漸時學界にも取入れられ、或は裁判上の實例に或は新立法の制定に着々とその地步を占めつゝある。

法の社會化とは法の合理化の事である、徒らに條文に囚へられずに社會の通念より法を解釋する事である、法に合目的性を認め公の秩序、善良の風俗を尊重する立場より、或は信義誠實の原則を確保する立場より、法律を見る事である、博士の言葉を借れば「うに」然たる權利を海月化する事である、從來の惡法も亦法也と云ふが如き「うに」の樣に刺のある法律觀を捨てゝ、法律上の權利を合理化し制限し支配する事である。

博士の講演は先づアインスタインの相對性理論に一瞥を與へる事に依つて說き起された。アインスタインは論理と實際との衝突より出發して遂にエーテルの流れを否定し、時間も空間も共に座標の如何に依りて變ずる相對性のものなる事を喝破したのであつた、然るに法律上に於ける權

利も、物理學上に於けるエーテル若しくは時間空間の如くに今や試練を受くべき時機に會せりと前提した。

轉じて最近の判決例を擧示して權利の觀念が如何なる制限を受くるに至つたか又その變遷の如何なるものであるかを剴切に示された。

その判例を擧ぐれば、ある乞食が腹痛で千佛堂の中に寢てゐるのを住職が箒の先で掃き出した爲め、その住職は病者遺棄罪として大審院判決三ケ月の懲役に處せられた、是れ元來住職が千佛堂の所有權を主張しお堂への侵入を防禦する事は差支なきも、苟も相手が病人なるに拘らず邪見にもこの事をなすは善良の風俗に反する事甚しきものあるが故である。

之を要するに斯くの如き例は最近頻々として起り條文通り一步も假借せず秋霜烈日の如かりし法律が、非常に人間味を帶びた優しいものとなつた次第を判り易く述べた博士は、近頃新聞上にも傳へられた白痴の妹を殺した兄が二年の懲役三年の執行猶豫になつた判例を指摘され「なつたものは仕方がない是からしつかり働らいて妹の回向をしてやれ」との裁判官の判決に人間味が溢れてゐるではないかと博士の言は濕つてゐた。

牧野博士の講演は雄辯なる點に於いて優り聲量は左程でもないが流暢平易で誰にでも判りやす

く系統的だとは云はれないが滿場を納得させた。問題が一般聽講生の注意を惹き易いものであつた事も人氣を涌かせた一原因だが、其の話振りに寂びがあつて如何にも學究的にそして親しい懐しみを抱かせたのはその人格の光でもあらう、博士が和歌に興味を持つて居られると云ふ事を一寸何處かで承つたが、詩歌を解する人は何處か餘裕があつて床しいものである、講義の中にも啄木の歌が出たり漢詩が讀まれたり、明治天皇の御製が唱されたりすると聽く人の心の轉換にもなり又それを和げる事にもなる。

以上本講演のお話は夫々特徴に富み、色とりどりに恰も春の野の百花燎亂を思はせて現代學界の精粹を集めた結晶體とも云ふべきものであつた、之を例ふれば植松博士の講演は其の鋭き事メスの如く、桑木博士のそれは重き事巖の如く、林博士はヒリリツとする事山椒の如く、牧野博士のドツサリは寂びを帶びたる事甲斐の國の禪寺の如きものがあつたとでも云はうか。

科外講演の方に移つては淡路出身の武岡豐太氏が「淡路の金石文」「幕末淡路の勤王家」「浮世繪の天神」に就いて縷々として興味深き御研究の一端を述べられた事は一味の凉風を與ふるに充分であつた。

永田秀次郎氏の「日本の堅實性」は亞米利加の共和政治より說き起して我國古來の民主主義の

歴史を尋ね聖德太子の憲法十七條、大化の新政の意義、明治維新版籍奉還の事實に及び我國體の萬國に比類なき所以を說いて年來の持論たる皇室中心主義を高調する處あり、最後に露國の過激思想に一矢を報ひて壇を下られた。兎に角私達は茲に永田氏の國粹的「獨特の考」を聽くを得て、淡路の名譽の爲めに更に大きく邦家の爲めに、此の士君子を思はする人格者、若き東京市長の健在を祈らないではゐられなかつた。

唯其の說の明治維新時代の勤王攘夷論者の言を出づる事數歩に過ぎざりしを遺感に思ひ、是からの日本を皇室中心主義一天張りで率いて行く事の可能及び可否に就いて考究の餘地なきかを茲に反問して置くに止める。

通俗大學會總裁後藤子爵の「自治の精神」は永田氏の御話と共に聽講生以外一般に開放したので滿場立錐の餘地もなき盛會裡に開かれた。

先づ子爵は、自治は人類固有の本能也と斷じ、本能的自治が經驗的に發達して法制的自治になる事を明らかにし、自治を離れて吾人の生存すべき樂土なしと得意の文句を吐いた後、少々脫線して現代國際政局に於いて支那露西亞獨逸の三勢力を輕視すべからざるを敎へ、自治的精神を確立して、徒らに英米に追從すべからずと時代順應主義を排斥し、滿腔の經綸のある所を仄めかし、

轉じて自治教育の必要を論じ教育家は第二の造物者なり大いに自重されたしと小學教員連に愛嬌を振り蒔いて降壇。

例の鼻眼鏡を光らせながら流暢なる辯でニコニコ然と滔々二時間に亘つてのお話、議論の進み行きにルーズの譏は免れないが、兎に角舊人中の新人たる面目は躍如たるものがあつた。

最後に今度の夏季大學は成功であつた事を大書したい、微細な點は別として會場の設備やら大學會幹事の斡旋振りなど總べて聽講生一同の感謝の種ならぬはない。

假屋沖に沈んだ潛水艇の引上げ費用の補助にもと聽講生連が百圓を醵金して贈つた事も此の間に起つた美しい一つの出來事だつた、三十日芽出度く講を閉づる式あり是より先き後藤子爵の入閣の飛報あり、斯くて大正十二年洲本夏季大學は何もかも都合よく大團圓となつたのであつた。

（淡路新聞連載自大正十二年九月七日至九月二十九日）

和歌

大正九年

（日誌より）

冠木門御堂へ通ふ石段に茶色の犬の眩ゆげに立つ

つばくらのさと眼の前をかすむるに一瞥くれて又路を行く

朝まだき起き出でゝこそ登りけめ蟬の啼かぬに山を下り來る

そのかみは本丸なりし城跡の脊高き松に風の囁く

亡き友の香や殘ると門口を覗きながら過ぐさびしき心

カサ〳〵と落葉踏みつゝ木の下をうつむき行けばベンチに人あり

話聲向の下宿に尙やまず夜更けて雨のトタン屋根打つ

友もよしされど又よし靜寂と孤獨の生活我あくがれぬ

そのかみの無邪氣さにこそ歸りけれ舊き友等と大いに笑ふ

大正十年

（日誌より）

鐵瓶のたぎる音きゝつ萬葉の集を讀みけり父の枕邊

訓導のなれの果なり印を捺す高津の宮の神主汝れは

美しき横顔持ちたる乙女なれど片目盲ひてあり悲しき運命（サダメ）

降る雪を枯木に止れる小雀のせむすべしらにたゞ啼きており

十日病みて衰へにけるわがからだ床に横たへ萬葉を讀む

春立ちぬ雪解の日に春立ちぬ木末にさわぐ小雀たぬしも

おごそかなる長靴はきて園守のベンチに憩ふ老の色見ゆ

故しらぬ哀愁我を圍みおり空虛（うつろ）心に太息（といき）をぞ吐く

青春の歡（よろこび）に滿ちて高らかに歌うたひつゝ紀ノ國坂行く

雜　八　首

（綠光處女號所載）

△

艶人をさりげなく追ひ越して我はかなき矜誇いだきけるかな

△

電燈を消して我耳そばだてばビヤノのしらべはたととまりぬ

△

我心はコツプにしづむ沈滓のごと動かんとせずされど平安からず

△

劣れりと見し我が友の碎かれし心尊く我眺めけり

△

相共に泣かむ人もやその膝をわが涙もてしとゞに濡さむ

△

我胸に色々のもの藏しけり恐ろしき思殊に多かり

△

秋の宵すべての人に幸あれと祈る心の我に宿りぬ

△

我ために朝夕祈る父母ありと思へばひとり涙ぐまるゝ

――一九二〇舊作中ヨリ――

木曾へ。木曾へ

（綠光第五號所載）

○

青春の若き血潮の高鳴りを木曾の深山に響かせなむか

○

突兀たる妙義の雄姿嚴かに我にせまりて左窓に立てり

○

朝露に濕へる草のたゞ中に海拔三千尺の標柱立てり

○

山を脊に朝霧の中に眠る村鷄の聲の平和にきこゆも

○

名にしおふ靈顯しるき善光寺の守札なり病父に送らん

○長　野

異國の情趣豐かなり噴水は花壇の上に水沫散らしつ

○

音にきく長野名物更科のざる蕎麥二杯平らげにけり

○

驛迄のみちのり聞けば首ふりて知らずと答ふる少女かはゆし

○

幸村が城址に立てばひんがしの空に淺間の煙立ち騰る

○

瑠璃と澄む山の温泉にひたり居れば心なごみてあくびなどする

○

名にし負ふ川中島の古戰場に幼な子供に石もてあそびつ

○

いたずらに水の音淋し三軍の矢たけびの聲心にえがくも

○

信濃路や空が峠の嶺に雨に濕ふ丹躑躅の花

○

アルプスは狹霧にかくれて見え分かず粉雨そぼ降る信濃路の旅

○

白樺の皮を削りて我前に歌でも書けと差し出したる友

○

から松を嬶女の姿にたとへみつ雨にそぼちて立つそのから松

○

遙々と探ね來りし信濃なる木曾の奥にもうまし子のあり

○

かどだちて天に聯る飛彈の山いゆきはゞかる大雲小ぐも

○

雲霧は木曾の深山を立ち罩めて寐覺の床に虹のかゝれる

○

五月空初夏の陽ざしに渾身の力をこめて畑うつわかうど

○

信濃路や薪木を脊に負へる馬の初夏の陽あびてそゞろ行くかも

○

乘降りの客も少なき山國の寒驛の長は五十路越えしか

消息

大正十一年二月十八日　（父　宛）

如月未だ半なるに春風駘蕩、梅ほころび木々芽ぐむ好時節、これから段々過どしよくなる事と存じます、じつと靜臥してゐるのは誠に辛氣くさいものと拜察しますがいら〳〵しても返つてつまりませんから、何事も思切りよく諦めて、暢氣に、病を超越して、光風霽月の境地に悠々自適されん事を祈ります、愚息高明も御蔭で輦轂の下で、兀々と勉學に耽つてゐますから御安心下さい、　母上へ　名刺正に落手致しました、父上の御介抱專一にお願ひ致します、御心勞の程御察し致します、私も三月中頃には又歸淡の豫定です。

大正十二年八月八日　（父　宛）

寺の第一夜も明けました。

寺の生活の一瞥もしたわけです。

先づ第一、部屋は、大師堂の横の庫裡の丁度裏手にあたる、二階です。

木の香も新らしい、明るい部屋、前からゐる、兵庫縣立商業五年の人と二人で、六疊と三疊の二間を宛がはれてゐます。

その六疊の間で一つの蚊張の中に二人が寢ます、上田と云ふ名の至極氣のおけぬいゝ人です。

晝の間は何處へ行つてもいゝのです、今も、同じ續きの別の六疊に借りた机をおいて、これを書いてゐます、（こゝは高野山の中學へ通つてゐる五年生のお弟子さんの居室です）ひるは事務所の方へ出てゐるので留守なのです、こゝから海が見えます。

昨夜は日中、本堂の横の大木の傍に床几を出して本を讀みました、大師堂の中もガランとして。ゐて日中などは靜かです。

和尚さんは、但馬か何處かへ講習に行かれて留守です。

お弟子さん達とも可成したしくなりました。

一緒に庫裡で食事をするのですから。

茲で忘れない樣に、食事の事を書いておきませう。

御飯は眞白です、まざりものなし、（安心致しました）暖い御飯と冷い御飯と二つのおひつが

乘つてゐます。

お客さんはどうか暖いのをたべて下さいとお弟子さんは云ひます、それで遠慮なくそれを頂きます。

但今朝は三杯目に茶づけをするために、冷めしを一杯又あとから半杯、よそつた樣なわけです。

各自、自分で御飯を、よそふ事は無論です。

次は菜の事になります。

昨日のひるは、なすびのみそあひ、お皿に一杯盛つたのが出ました、そのあとでうまい澤庵で茶漬けです。

夕飯は馬鈴薯と天ぷらと玉黍蜀とを一緒にして煮たものです、馬鈴薯なんか食ひ切れぬ程山もり盛つてありました、今朝はなすびと玉黍蜀のお汁です。

皆んなうまいです、茶も又香ばしく上等です四杯平均に食つてゐます、食事のあとで、各自の茶碗はこれを所定の所に了つておくのです。

昨晩は夕飯（六時）後入浴致しました、あさ飯は七時頃その他すべて自由です。（今朝起床五時半）

昨日はひるから少し、つかれてゐたので晝寢を一時間ばかりやりました、流石山だけあつて吹

く風もひやりとします。

殊に昨晩山門の前の床几の上で涼んだ時は、星が飛ぶかと思はれる程濕氣を含んだ風が、何處からともなく吹いて來て、上物部の方へもお裾分けが出來たらばと思ひました。

今日は昨日程蟬が鳴きません。

當分——少なくともこの二、三日山を下る氣はありません。

小生宛の書信一括して御轉送下されば幸甚です（母上へ）そのついでに、一錢五厘の切手十枚ばかりお送り下されば尙ありがたいです原田林次樣の三十五日詣りは十三日ですか、十四日ですか、序でにお知せ下さい、昨日は郵便配達來ず、折々怠けるのだそうです。　朝十時半

大正十二年十月二十三日　（石田啓次郎宛）

昨夜は態々築港のはし迄御苦勞でした。船の中でゆうべこそはよく寢た、六時間半の船旅を五時間は確かに熟睡した、お株を奪つた樣で氣が引けた。

淺村はどうかしら、心配性な男だから、あまり氣を揉まぬ樣にと云つてやつてくれ。本の方、

よろしくたのむ、池田宛よろしく云つておいて呉れ。

東京の友人細谷宛經濟學の本を一二冊やりたい。

Economics of Industry-Marshalls と云ふのが昨夜見た目錄の中にあつたが、可成ぶあつい本かしら。あまり薄つぺらなものだとしたら今一つ經濟學の英書（日本書は大抵持つてゐるから）を細谷隆介行の分として池田宅への明細書にかいて置いて呉れ、次に小生一冊所望がある、社會學原理（高田保馬著）これである。無理にとは云はぬ、すべて君にまかした。あと殘つたやつは、天中と商大寄附として一々池田へ報告たのむ。よろしく。

小西が河上博士「近世經濟思想史論」をほしいと云つてゐる。

大正十三年八月九日　（谷口豐三郎宛）

東京あての御葉書、あちらから轉送して來た。ありがとう。僕は先月二十九日歸鄕した。二十八日大阪によつて、あちこち廻つた、池田の家へも寄つた、淺村の家へもよつた。池田の家で遺稿出版費の話をした處、不足の費用のみならず、お友達に出して貰ふのは氣の毒だから全部の費

用を自分の方から出さして貰ひたいとの事だつた。

これで金の不足の方は、とにかく安心だ。石田の擔當の清書分も持ちかへり、淡路で小西が清書した。横井、小西の分が大阪に殘つてゐる外、全部淡路に揃つた。

印刷所も大阪で一軒見付けた。本交渉をしに近日上阪しやうと思つてゐる。親父が一寸、淡路の外へ出して呉れないのでこの一週間弱つてゐる。ひよつとしたら九月三日迄には難かしいかも知れぬ。

とにかく兄はしつかり働らいて呉れそして身體を御大事に。

僕は實は九月に高文の試驗を受ける。八月二十日過ぎに東上したいと思つてゐる。

大正十三年十月二十日　（一本松珠璣宛）

十八日出の御手紙昨夜拜見した、校正大變だつたらう、四百六十頁と云へば、正に堂々たる大冊だ、併し隨分澤山な時間と勞力とを兄に費さしたわけだ、金の心配もいろ〳〵御盡力様、費用は概算全體でいくら位かゝる豫定だ？

製本の事、東京の連中と相談して見る、一度東京へ送つて又、その大部分を大阪へ送りかへすのは少し手數がかゝりはすまいか。

お互の出金のだら〳〵になる事はお說の如く禁物だ、來年三月に皆んなが卒業するまでにスツカリ片をつけて了ひたい。配本の際の寄附も必要だ。

遺稿出版趣意書てなものを別に作る必要があるね、これ又、石田、谷口、山口、千種とはかつて見やう、感謝する。

十七日から三日間、那須、鹽原の旅を企てた。以つて些か英氣を養ふ事を得た。昨夜歸宅したら高文（行政科）筆記試驗合格の通知が來てゐた。本當に僥倖だ、二十七日から口述試驗が初まる、しばらく猛勉强だ、身體を御大事に。

大正十三年十月二十三日　（千種達夫宛）

湯元温泉からの御葉書拜誦、丁度今がさかりの紅葉の色さぞ美しかつた事でせう。

那須鹽原三日の旅を了へて十九日夜歸京致しました。留守中御訪ね下さつた由、どうも失禮致

しました。

次に高等試驗行政科の筆記試驗僥倖にも合格旅行から歸つたら通知が來て居りました。口述試驗が二十八日から隔日おきに來月十二日迄あります、ともかくも、此頃は法文と首つ引き、散々なていたらくです。自信などは一寸もありませんが、あたつて碎けろで猛進するつもりです。色々御心配下さつて感謝します。秋氣漸く濃か、幸に御自愛あらん事を祈ります、因みに外交科の方は脆くも落選致しました。

大正十四年二月七日　（母　宛）

四日付の御手紙有難う御座いました。

この頃手紙が怠り勝ちで父上の御機嫌を損じた段まことに申し譯御座いません、この頃試驗間近に迫つた上この學年は、高文受驗やら何やかやで大分脫線してゐたので人一倍の努力を以つて勉强する必要があるのです。

その他アルバム委員をやつてゐるので仲々多忙です、身體の方は先づい〻方です、夜も八時間乃至九時間睡眠をとつてゐます。

今に睡眠時間も少々短縮して大車輪で猛勉强をやるべく餘儀なくされる事と存じます。

お餅お送り下さつて有り難う、毎晩二木が燒いて呉れます。

醬油をつけて、それに海苔をまいてたべます、これが東京流でつけやきと云ふのです、二木は横濱海上保險會社に僕より先きにきまりました、東京支店へ四月一日から通勤です、一週間前に雪が降つて今日は雨が降つたので、風邪の流行も收まるでせう、母上御壯健何よりです、おたかさんも氣安い所へ行つていゝ事でした、たゞ後に殘つた母上がおこまりでせう、家を建てるのも沙汰やみになつたわけですね、せつさんお嫁入りの由、早速お祝狀を出して置きませう、菊代さんの分は、房五郎叔父から通知を受けて賀宴當夜、ガンブロウあて祝電を打つておきました。

次に小生の結婚問題、皆樣の御配慮を忝うし感謝の至です。

洲本高女十數名は中々威勢がいゝですね、處でこう云ふ問題は非常に纖細な性質を持つてゐますから、あまり向ふ見ずに進行さしてゆくのは危險の樣に思はれます、どうか御愼重に願ひます、淡路人に限るとの御意見參考の爲め有り難く拜聽致しておきます、豫算編成について父上の御配慮の由御苦勞に存じます、乍併元來豫算なるものは年度に依つて、物價の高低あり、出費の變動

あり、即ちその年月に應じて具體的に之を決せざるべからず、抽象的なる推定豫算はその効果の減殺を免れずと御進言あらん事を希望致します。

三木七郎氏この度の御盡力、やはり親類ならではと感佩の至り添田博士にも最近再度御面會致したいと思つて居ます、父上は御病體なれば御無理なされまじく添田氏あての禮狀など隨意になされ度、小生よりよろしく申し傳へておきます。

父上はこの際、世間への義理や人情一切御無用と存じます。

たゞ一意御靜養こそ、望ましくと存じます。

添田氏へ土地のものなど御送りも亦無用、つとめはほど〳〵がよろしくと愚考仕ります。

脊廣もあちこちの洋服店から注文を取りに來ます、これも急がぬ事です、御心配御無用に願ひます、金は今の處あまつて居ります。

本も少しづゝ買ふ必要あり、たらぬ樣になればお願ひします。

微兵の屆も承知致しました、房五郎叔父御東上歡迎致します、但し、小生結婚問題について態々御上京はお氣の毒です。

次にかゝる問題を御地の方で獨斷で進行させられ、母上の云はるゝ如く「切迫せる形勢」を馴致せしめらるゝ事は一寸どうかと考へ物です、要するに小生は漸進主義ですからその御心算で。

この頃しばらく、あい祖母に會はず、明後日の日曜頃訪ねて見たいと思つてゐます。

明朝、稔君が上京します、東京驛に迎へるつもりです。

就職の面會のためではないかと思つてゐます。

皆樣へよろしく、父上御大事に。

大正十四年四月八日　（父　宛）

出勤第一日、主税局間税課調査係の椅子につく、八時半なり、大正十三年東京帝大政治科出の法學士と向ひ合せなり、名を青木と云ふ新進の大藏屬、中々親切な人なり、昨日は午後、辭令を貰つてからこの人につれられて各局の高等官連中に挨拶にまはりたり、一々辭令を見せて「どうぞよろしく」と云ふ、中々骨なり、仕事は暢氣なり、おひ〳〵なれる事と思ふも初めての事とてかなり頭を用ふ、晝食は青木氏が、同僚の法學士、經濟學士達と共に、海上ビルディングの三階、中央亭へ案内し呉れたり、關税に關する一般智識を急遽つめこむ必要あり、毎晩本を讀むを要す、

こゝしばらく中々多忙なるべしと思ふ。
局も課も中々いゝ所へ入る事を得て滿足しをれり、大藏屬振出し最初の日の報知かくの如し、あとより續々おたより致すべし。

大正十四年十二月一日　（父　宛）

入營第一日あわたゞしく暮れぬ。
食事も大してまづくなし、馴れゝばうまくなることゝ思ひます。
午飯五分、夕飯七分どころ平らげました。
午後聯隊長及大隊長の訓辭あり。中隊長も課程につき詳細の說明あり。
入浴、氣分大いによし。兵科に關する小冊子六冊、二圓二十五錢にて求む。
酒保へは當分行けぬ樣子です。

大正十五年四月四日　（父　宛）

お變り御座いませんか。
一日夕方から二つ星をつけてゐます、陸軍歩兵一等卒になつたわけです。進級序列は志願兵十八名（第五中隊）中、第四位、中々右翼（軍隊語、好成績の意）の方です。
上原元帥の巡視があるので、今日の日曜は全聯隊の大掃除で居殘り一寸がつかり致しました。
昨日、夕、一本松が廣島から三泊の休暇を貰つたとて隊をおとづれて呉れました。極めて元氣、快談を交へました。
十六日から又信太山へ行くらしいです。なんでも十一月末までにはもう六七回信太山かよひをするさうです。御身御大切に。

大正十五年十二月十六日　（父　宛）

毎日中々忙しいです。

やはり頭を使ひます、一年間休んでゐた頭腦を急に働かし出すのですから大分疲れるのも無理からぬことです。

佛蘭西語の飜譯が大分たまつて居りました、關税課に來るフランス物は小生一人が片付けるのですから少しは骨です、それにこの頃はフランスの保税倉庫の調査を擔當してゐます夕方歸宿してからは讀書、それも久しぶりなので興が乘りそして時間の不足をかこちつゝ毎夜十一時頃就寢致します、大分勉强する必要があるのです。

それでも寢るまでには一度散歩に本郷通りやら上野廣小路の方へ出掛けます。

身體の方は充分注意してゐますから御安心下さい。

昭和元年十二月三十日　（三木房五郎宛）

昨二十九日太陽、今三十日中央公論正月號、何れも正に拜受、休暇中の好讀物、有り難う御座いました。

昨日から休み、何處か伊豆の温泉あたりへ出掛けやうかとも思ひ金子事務官などからは赤倉スキー行なども誘はれましたが懐具合もあり、東京に閑居することに致しました、お正月にはあちこちへのおつとめもありますがのんびり芝居見物などもやりたいと思つてゐます。

いゝお正月をお迎へなさいませ。

御身體を御大事に、

昨夜宿料拂ひました、金三十五圓也、早々。

昭和二年十月三日　（谷口豐三郎宛）

滿期除隊お芽出度う。

白馬の隙を過ぐるが如しとか、すぎて見れば早いものですね、軍隊から度々御音信を頂いて有り難う。

僕の方は却つて御無沙汰して相濟まぬ。

疊の上の寢心地のこの二三日とてもよいゝことだらうと推察する。毎朝早く眼が覺めて困るだらう。

とにかく、こゝ暫らくはゆつくり御休養の程を祈る。

御兩親もさぞお喜びの事であらう。

こちら不相變、大藏屬は依然たる吳下の舊阿蒙だ。地方への進出期もどうやら乍併、近づいたらしい。

兵隊へはもう行かないでいゝ手筈になつてゐる。

八月の後半、二週間、大阪神戸兩稅關へ出張を命ぜられ、序でに淡路へも歸つて參りました。公用雜用多端、何處へも御無沙汰、淺村にも會へなかつたのはあとで殘り惜しく感じました。

其の後まだあまり勉强も致しませぬ。氣永くやるつもりです。

兵隊生活一年はいゝ事もありましたらうが、大分祟りも致しました、地方へ出れば大分伸び〳〵する事だらうと思ひます。

關西方面へ出らるればいゝと思つてゐます、やはり土地人情の馴れてゐる土地はやりいゝ事と思ひます。

關西で最近異動のある模樣なのは、奈良、茨木、姫路なんど、關東では前橋、それから北、福島、盛岡、九州では佐賀、大分などとりどりです。

雜誌暫く不活動の狀態にあるものゝ如し、復活方御考慮を乞ふ。

正月休みにはお眼にかゝれることゝ思ふ。

一本松、石田除隊大分賑かになることだらう。急に運動不足になると毒だ、精々運動したまへ。

東京へ來ないか。澤正でも見に。

帝展も今に開く。築地小劇場もよからうではないか。同人遍歷とでもやらかしては如何。とにかく恙なくおつとめ、お芽出度う、乍末筆御兩親へよろしくお傳へ下さい。

再び御自愛を祈つて擱筆する。

昭和二年十月十九日　（父　宛）

小切手金五十圓也正に拜受致しました。

マント、合服の裏返し、夏服、セルのクリーニング、靴の修繕、經濟書の購入、その他の臨時費にあてるつもりです。

役所この十日間一寸多忙、仕事は本年間の貿易豫想、大分勉强にもなりましたが中々困難な仕

事でもありました。

昨日退廳後房叔父と行を共にす。

色んな計畫や希望談に花が咲きました。

學者か、政治家かと云ふ事になつて勿論後者をとると云ふ私の決意でした、ところでこれから十年間は少なくとも勉強に專心する必要があるといふ事になりました。

勿論自己宣傳も必要です、とにかく大局に眼をつけて大綱をつかんで、グン〳〵行かなくては駄目、專攻は財政經濟もつとも好題目です。即ちこの間大藏省に沈潛して底力を養ふこと。

政黨は、現在のところ何黨にも大した愛着を感ぜず。

無產黨には入り切れざるべし、先づ中產黨位の處なるべし等々。

まだ後の事なり、今のところもう少し落ちついて讀書思索實力を養ふ要あり。

さしあたり稅務署長の仕事でも、稅法の理解でもに精進すべし。

二三日前より袷をきる。秋氣ひや〳〵と身に泌む。

火鉢のほしくなるも遠からぬことなるべし。

上野の帝展と日比谷の菊はこの頃の東都の景物なり。

鹽原、日光の紅葉今をさかりとか。

バラックの本鄕に秋をそむきて二日の休みを過しけり。

次の日曦頃郊外に杖を曳いて淸澄なる秋氣を呼吸せん所存。

この年末から年始へかけての休暇には歸省する事を得んかと思ふ。

せい〳〵五日間なり。

冷氣日に增す、御身御自愛の程を切に祈ります。

母上も御大事に。

お菊さんも御機嫌よう。

年末歸へる時には稍々懷も暖かなるべし。

高机と籐椅子一つ買はんと思ふ、未だ考慮中

房叔父上京してこゝ暫く賑かなるべし。

幸に頑健、每朝冷水八杯（但入浴後）

皮膚病も完全に退治し終んぬ、先づ黑點もなき方也。

先づはめでたき話のみ。

昭和三年一月十七日　（父　母　宛）

補小樽税務署長、水本高明、の文字を昨十五日の報知新聞朝刊に見出す、かねて覺悟してゐたことゝは云ひながら一寸遠いなと思ふ。

同日ひる、前からの約束もあつたので下落合の友人（矢吹）の家を訪ねてのかへるさ、飯田關税課長を私宅に訪ふ。

小樽の枢要地なる所以、札幌税務監務局長より特別に學士の署長をとの話が主税局長の許へあり、同地の商港にして税關支署の所在地でもあり將來伸びる爲にも好都合でありたゞ少し遠隔の地ではあるが長く居ると云ふわけでもなし一つ腕のみがき場所として君を推薦決定したと云ふ意味の主税局長の意見であるとの話をきく、二木の家で夕飯。

轉じて藤井主税局長及金子預金部管理課長の兩家へ挨拶にまわる、何れも主人は不在、

歸宅、田村の叔父さんへ小樽行の話をするみな喜んで呉れる、即ち寢る。

十六日即ち今日は平常通り朝風呂、モーニング着用、先づ報知社行、七郎叔父、佐野周氏へ挨拶、何れもお芽出度うと來る。

小樽税務署長司税官水本高明の名刺を註文する、轉じて大藏省行途中、金子さんと會ふ、同氏の岳父は北海道選出の貴族院多額納税議員、小樽附近に廣大なる土地邸宅を有する、今後よろしくたのむとの話に恐縮する今度の異動はかなりな大異動だつたが判任學士から新たに司税官になつたのは四人大正十二年出二人。（洋行歸り）

川崎税務署長　田中　恭

浦和税務署長　竹　内

今一人は大正十四年（小生と同期）大分税務署長　塚越虎雄

それに小生を加へて四人である。

辭令を貰つてから一諸に省内高等官連へ挨拶に廻る、藤井局長からは昨日關税課長からあつたと同様な話に加へてしつかり勉強して呉れとの激勵の言葉があつた。

辭令の文句は次の通りである。

税務事務官補兼大藏屬　水本高明

任司税官
叙高等官七級
内閣總理大臣勳二等功一級
男爵　田中義一宣

次の一枚は

補小樽税務署長、とある。

札幌監督局監内に於て小樽は國税徴收額の一番大きな署であつて其額三百八十九萬圓、札幌第二位、函館第三位であつて、全國三百數十の税務署中實に第四十一番目に位する税務行政上に於ても極めて重要なる位置にある。

署員判任官二十七名、雇員十六名合計四十三名外に臨時署員が十名程ある、前任者は特別任用の人で、その後へ行くのだから一寸骨が折れるが、又却つて無理をせなければ樂でもある。若手の署長と云ふので大分活氣もついて來るだらうし小生もその期待に背かぬ樣にやる決心もあるし些かながら自信もある。小樽から既に祝電が三通、前任者、遠藤久浪氏とは二十七日午後青森に於て事務の引繼をやる打合せも電報で濟した。

こゝ一週間あと始末や送別會で忙しい。

今日は既に主税局の同僚主催の送別會があつて、それから歸つて床の中でこれを認めてゐる、こゝ五日程の豫定をあげれば。

十七日、少壯學士會（大藏省高等官及判任學士）
十八日、讀書會（判任學士の會）送別會。
十九日、金子監理課長の宅にて晩餐會。
二十日、朝陽會送別會。
二十一日、關税課、新橋演舞場觀劇。

それで二十二日出發一寸歸國、大阪神戸のしるべもあいさつして東上延期するはづ。

汽車汽船の便よろし、一年に一度又は二度は歸國出來ます、小樽には大體二年は居なくてはな

りますまい。そのあとは西の方へ、都合よくゆけば大阪、東京附近へ轉任出來る筈。小樽には官舍があります、一躍北海道の名士に入るのですから何と云つても骨は骨です。

からだ、調子よろし。萬事無理をせず實着にやつてゆくつもり、其の他委細は歸國のせつ。

明十七日は添田さん及池上方面へまはるハヅ、高等官への挨拶の殘りもすませます。

札幌税務署長(經濟學士)新敏雄氏は大正十三年東大經濟科出身、函館税務署長は池田勇人君、小生と同期大正十四年京大出の法學士、何れもよく知つてゐます。懇意の仲ですから都合よろしい。

小樽は北海道に於ける貨物の集散地であり丁度本州の大阪とも稱さるべき地ですから大きな商店や銀行の支店出張所が澤山あり商大の同窓などもかなり行つており、尙同地には高等商業があるので學問的刺戟もかなり强からうし勉强するのにも都合がよろしい。

先代加藤高明が三菱銀行員たりし時、岩崎の眼にとまつてその婿がねに選ばれたのもこの地、これは少し餘談ですが濱口さんが地方まはりを初めたのは沖繩が振出しとか。

中原の鹿はよろしく先づ遠くから之を狙ひ見る事を必要とする。未知の國北海道の概念をこの二年間?靜觀するのも將來の計を立つる上から云つても決してむだな事ではないと確信致します

たゞ一つ父上の膝下から大分離れなければならぬのを遺憾としますが、これとても御用の節は一本の音信を承はらば三日目の朝にはお目にかゝれる事が出來るのですから、昔とちがひ文明の世の中、手つ取り早いものです。

先づ今日はこの程度にして其の後の動靜情報又は感想はあとより申し述べることゝ致します。

時節柄御身御大切になさいませ。

母上も御大事に。

十七日あさ認め終る。

昭和三年一月二十八日　(父　宛)

青森驛待合室にて昨日午後一時より三十分間位にて前署長遠藤氏と挨拶引繼を了し谷口青森税務署長の見送を受けて夕五時連絡船、松前丸(三千噸)に乘じて本州を離る。船中無事。母も林檎とさばずしを食ひあとは寢て、津輕海峽を横斷、午後十時函館棧橋に着すれば、池田函館税務署長、署員二名を隨へ、小樽税務署よりは庶務課長外一名うや〳〵しく出迎へる。粉雪降る中を

自働車に乘じて池田署長の官舍に到る。入浴一泊。税務署を經て今二十八日午後〇時四十分函館發、一路小樽へ向ふ。雪やむ。

昭和三年一月二十八日　（飯塚濟子宛）

心靜かに雪が降る――滿目白がい〳〵たる北海道の廣原を汽車は北へ〳〵と走る。
天然水を積んだ橇が行く、子供たちはスキーでスロープを滑つてゐる。
車内にはスチームも通つて居れば、食堂車ではビフテキも出來る
粉の樣な雪が、乍併、窓外には降りしきる、母は横に寢てゐます。
小樽着はあと一時間半。
遠い所へ來た樣な氣がしない
雪國情調も捨てたものではない樣です。
御身御大切に。

昭和三年三月二日　（佐藤敏子宛）

雪國の騎士とおだてあげられては滿更でもなく一書なかるべからず。ところが熱はもう下りましたか、若い間はとかく出るものです御用心御用心。角卷姿と云ふのを御存じですか、中々艶なものですね、公務多忙、判こや書類堆裏から飛び出して見る、雪國情調、それは新來の私にとつてはまだ珍らしい事が多いです。
山よりのスロープではスキーやる若者の雄々しいポーズ。
氣温もゆるみ、雪も街の道から解けそめて春の近いのを思はせます、盛年再び來らず、若いものはお互ひに自重しやうではありませんか。
御感想如何、願はくば元氣なれ。高はし、永ふじ兩兄へよろしく。

昭和三年六月二十日　（荒井正男宛）

北海道に滿腹してゐる！

こう云ふエキスプレッションはどうだ。牧場を見た。仔牛に戯れた。ところは岩内と云ふところ、五百町歩に四十頭だ。濃い牛乳を飲んだ、牧場の娘が鈴蘭を摘んで呉れた。そこで家鴨のたまごを食つた、等々。要するにその日僕は幸福の絶頂にあつたよ！

それからまだある、夕飯を御馳走になつて、歸りに新鮮なバタを小さな木箱に一杯貰つたよ。——その木箱は今、何處にあると思ふ。あて〻見たまへ——あたつたら凄いもんだ。スリユードつてどんなスペルだ、すぐ返事したまへ。日本譯も一しよに。歌は中々いゝ。二三日あめだ。涼しすぎる。東京の浮世繪見たくないか。この秋頃須磨あたりで落ち合ふ氣はないか。そしてまる一日ぐらい落ちつきたいなあ。ロンドンタイムスきだした、讀んでる。伊澤と正邦をしい、朝日の記事を見たか、まだなら切抜いておくる。

昭和三年九月七日　（父　宛）

父上御微恙、その後御經過如何。

熱が出るのはよくありませんから心身の御靜養專一に祈りあげます。

何事も平々坦々たるがよろしく、激情、物慾その他の波瀾異常等は病身に大の毒です。どうか出來るだけ消極的に情も節約、聲も節約、不平小言も節約、一意沈默、沈視、加養の程切望に堪へませぬ。

心頭を滅却すれば火も亦涼しとは古人の言葉、凡人に難かしい悟りではありますけれど、どうか無爲自然、長生の工夫をお願ひ致します。

地價調査委員會は十三日再會一二日で終り、署長會議は二十六日から四日間です。九月一日から署の勤務時間午後四時迄になりました。まだ中々暑いです。

北海道には蟬が少なくこの夏は一向ミン〳〵の聲もツク〳〵ボウシの聲も聞きませぬ。一體に生物が少ないのでせう。

どうか熱をおだしにならない樣に、それが一番心配です。無爲無想がいゝです。色んな事を考へず、いやな事はせず無理禁物、入浴等もしばらく遠慮、丹田に少々力を入れて、いゝ空氣を吸ひ、看護人を叱らず、喋らず、うまいものを適度に食つて、食ひすぎをせず、水は適度に飲んで腹くだりをせず、まゆよせず、腹をあまりひろげず、いつもニコ〳〵でお願ひ致します。

どうも遠いところで、思ふ様に歸郷も出來ませぬが、外國とちがひ一度思ひ立てばいつでも二日半で歸れるのですから、御心配御無用。青森から秋田まわり神戸行が近道です。

汽車賃も三等で行けば廉いものです。

三宅さんの自然療法は如何ですか、色んな療法に依らず、結局自然が唯一の治療者なのですから、之と相談するのが遠い様で近い最良の方法かも知れません。

小生は御蔭で元氣な方、毎日かゝさず出署、捺印決裁、訪問客の應接、人事の問題その他に多忙です。

最近夜も早く寢る様にしてゐます。

その他變りなし。變りがないので一番いゝ事だと思つて居ります。

どうかあまり熱が出ない様にと遙かにお祈り致して居ります。小樽税務署にて。

昭和三年十月二十四日　（伊藤靜夫宛）

余市林檎の尤物「十九號」二貫目約三十餘個送る。

北海道産の林檎が本當の林檎の味を持つてゐるそうな。よつく賞味してほしい。

敏子さんは云はずもがな、更に妹さんは申すに及ばず幸便あらば、矢吹、二木、細谷なんて連中に二三個づゝ位分けてやつて呉れゝば幸甚だ。

もう一つ、大きなところを二個づゝ位、大西さんと飯塚さんに配つて呉れゝば我が感謝は一層大きくなるであらう、かへつてスマナイナ。

昭和四年三月十三日　（丸　狷三宛）

人ヲ用フコトノ難カシサ、毅然トシテ勉強スルコトノ難カシサ。

收税吏タル役目、即チ對外的交渉ノ難カシサ遊ビスギルコト、運動不足。

義務ノ不履行、文債ノ山積、神經ノツカレ、物ニアキヤスキ。

ホルモンノ過剩、方正ナル品行。

宴會攻メ、食ヒスギ、ノミスギ。

雪バカリ原色ヲ見ズ等々。

ワズカニスキーアリ、辛フジテ慰ヲ得、亦アワレナラズヤ。失敬。

昭和四年五月二十日　（森田優三宛）

金五圓七十錢正に受取つた。丁度よさそうだ。

金融の講義、願はくば簡にして要を得しめよ、大きな事を教へて小さな事を教へるな。

この頃仕事が、ひつかゝつて少し頭痛がする。天中の旅行までには（多分三十日三十一日だらう）落ちつく事と思ふ。

青葉の五月、神經衰弱になるよ。

昭和四年六月二十八日　（父　宛）

今日ハ美國町ヨリ徒歩一里半、古平町ノ土地檢査ヲ終リ本川酒造場ニ一憩、轉ジテ役場訪問、町長ト用談、町長名ハ武田典、淡路阿萬ノ人ナルヲ知ル。

共ニ警察署ニ至リ武道大會ニ列席ス。來賓挨拶ニハ萬事體力ノ世ノ中ダト云フコトヲ强調シ愈々柔劍道試合ニ入ル。京都武德殿行ノ話ヲシタトコロ、是非審判官ヲヤツテ呉レトノコトニナリ、久シ振リニ町ノ有志種田氏ノ副審トシテ數番審判ス。

アトデ到頭飛入リ、種田氏ト引分、タオルヲ賞トシテ受ク。自働車デ再ビ余市ヘ。

昭和四年八月十八日　（父　宛）

一年七ケ月目ノ轉任ハ早イ方デス。

秋田ト云ヘバマダ奥州ノハシ遠イト云ハバ遠イデスガ、神戸行ノ急行ヲツカマヘレバ、淡路マデハ一日アマリデ歸レルワケデス。

青木（得三）主稅局長ノ郷里タシカ町田農相ヤ榊田清兵衞ナドノ郷里、政黨ノ爭ハ激シイトコロラシイデス。ソノ他密造ノ盛ナトコロトカキヽ及ビマシタ。

先ヅ中央ヘ乘リ出ス順序、階段ノ地トシテハ申シ分アリマスマイ。

二十七日頃出發赴任ノ豫定デス。御自愛ヲ。

昭和四年九月十三日　（母　宛）

八日後七時秋田驛着、課長連ノ出迎ヘ。

龜ノ町西土手町ノ住居ニ入ル。女中アリ。

九日朝、秋田發仙臺ヘ、十日仙臺稅務監督局ヘ出テ挨拶、十一日歸秋、十二日出署、近郊新屋（アラヤ）町ノ酒屋マワリ。十三日本日ハ土崎港町ヲ視察スル筈。

毎朝、入浴散歩。隨分涼シクナリマシタ。

市ノ内部モ一通リ巡察、古イ家並、辯護士ト保險會社ノ多イ町、落チツイタ街デス。

毎晩、蟲ノ聲シゲシ。

燈火可親。シツカリ讀書デモスルコトニ致シマス。

尙次宛ヘ御弔詞御禮御香奠拜受御禮オ出シ下サレ度ク香奠ハ同封致シマス。

小樽市絲町三丁目八　池田昇一（二圓）

東京府下高田町雜司ヶ谷龜原六〇　飯塚濟子（三圓）

二逮夜ガ今晩。

オ淋シイオンコトヽ存ジマス。小生トシテモ天ノ一方ニ穴ガアイタ樣ナ氣特、イヽ父親デアリマシタ。オ菊サン、池澤叔母、ミンナ親切ニシテ呉レタ人、ソレニオ高サン、ドウゾ優待アランコトヲオ願ヒ致シマス。今日ハコレ迄。

昭和四年十月二十二日　（石塚京子宛）

オ手紙ガオソクナリマシタ。

初メテノオ手紙ト云フノデ大分改ツタ氣持ニナリ又次々ニ起ル仕事ノ爲メニ妨ゲラレ今日マデノビノビニナツタワケデス。

改ツタ御挨拶ワ乍併ヨシニ致シマショウ。

オ互ニマダ若イデスカラコレカラ色々修養モシ知識オ磨イテユク必要ガアリマス。殊ニ小生ワ生來ノ鈍根、今後一意精進ノ路ヲ辿ツテ行ク決心デスガ、尙ソノ大成ニワ大イニ内助ノ功ニ俟ツベキモノデアロウト考ヘマス。結婚生活ト云フモノハ必ズシモ甘美ナ輝カシイ喜樂ノ集積ノミデ

ワナカロウカト考エマス。殊ニ小生ノ様ナ貧乏ナオ役人ニトツテワ色々ナ苦勞モ多カロウト存ジマス。豫メ多クノ艱難ニ對スル勇マシイ覺悟ガ必要ダロウト思イマス。遮莫、私ワ結婚ガ私ノ人生ニ於ケル大キナ遷移點デアルコトオ疑イマセン、ソシテソノ新生ノ侶伴トシテアナタオ選ンダコトニ喜ビオ感ジテ居マス。

平坦ナ路、ソシテ險阻ナ峠、長イ旅オ續ケテ行ク二人ノ旅人オ私ワ思イ浮ベル。元氣デ雄々シク進ンデ行キタイト思ヒマス。

サテ、ソノ初旅ノスタートノ地、秋田ワ淋シイ、不便ナトコロデス。小樽カラ來テサエ、ソウ感ジマシタ。マシテ東京カラ初メテ來ルト火ノ消エタ様ナ感ガスルカモ知レマセン。併シ一方、靜カナ落付イタ町デス。千秋公園トイフ大キナ公園モアリマス、講演會ヤ音樂會ノ多イトコロデス。人情ハ粗朴デ、言葉ワ惡イガ、頭ガヨクテ議論ガ好キナノガ秋田人デス。

十月一杯ワ到頭東京エ出ラレソウモアリマセン。ト云フノハ十一月ノ下旬マデワアマリ休暇オトリタクナイノデ日曜オカケテ上京シタイト思ツテイタノデスガ、コノ月ノ十三日ニワ轉宅、ソレカラ十八日迄ワ山形エ出張、二十日ノ日曜ニワ納税講演會ガアリ、次ノ二十七日ニワ十和田湖エ商大ノ同志ト出掛ケルコトニナツテイマス。

來月二、三日ワ署長會議ガアルノデ仙臺マデ參リマス。ソノアト都合ガツケバ一寸出京シタイト思ツテイマス。色々オ話シモ致シタイシ、序ガアレバ帝展モ見タイト存ジマス。

式ノ日ワ何日ニキマリマスカ、私ノ方ワ十一月下旬何日デモイヽワケデス殊ニ二十四日ナド恰好ト存ジマス。二十六、二十、二十二日何レモ亦妨ゲズデス。

ソレカラ荷物ノオ支度ワ出來ルダケ簡素ナノガ結構デス。少クトモ小生ノ方ワ極メテ身輕ナモノデス。

御兩親エヨロシクオ傳エ下サイ。

御身體オ御大事ニ、ソシテオ手紙オ下サイ。

皆様御機嫌ヨウ。

第一信ワ之レニテ閉ヂマス。

昭和五年二月二十日　（荒井正男宛）

只今、金子洋文ノ演說會ヲキイテカエツタ、奥むめを女史ノ應援演說ガアツタ。中々煽動的ダ

ツタ、久シ振リニ愉快ナ氣持ニナツタ、安田銀行ニ出テイル平野彌三郎君(近所ニ下宿シテイル)ヲ誘ツテ行ク。次ニ坪田豐太去ル十二日函館ニ客死ス。新婚後一年ニ充タズイタムベシソノ薄命。オ互ニ用心シヨウゼ。須磨ノ收獲ハイカガ。京子カラヨロシク、貞淑ナル賢夫人振リダ。呵々。

昭和五年四月二十三日　(池田昇一宛)

ソノ後御無沙汰、御健闘ノ趣大賀。

コノ度ワ數子(カヅノコ)御惠送ヲ忝ウシ御芳情多謝。小樽近海鰊豐漁ノ趣御同慶至極ニ存ジマス。當地モ氣候定ラズ、寒暖、晴雨交々至リ、未ダ花モ膨マズ、花見ノ氣分モ隨ツテ出テ來ズ、月末ニナレバ乍併氣運熱シ、春氣動クコトト存ジマス。御地トモ一別以來スツカリ疏遠ト相成リ、一度御訪問致度氣持充分ナガラ、遂ニ今日マデ果サズ、サレドソノ追憶ワヨロシ、春風秋雨二星霜ニ垂ントシ感多少。小生モ久屈ノ後ニ伸ビソノ内ニワ池中ヲ出ズル心底、幸ニ援助ヲ惜シム勿レ。

結婚問題ニワ愼重ナレ。ソノ他公私トモ御自重ヲ祈ル。何彼ニツケテ御相談タマワラバ、微力ヲ傾クベシ。月末ヨリ三日間仙臺、署長會議調査委員會ワ來月上旬ヨリ市郡トモ。田畑所得ノ減極メテ大、不相變相當强氣ニヤツテ居リマス。臨時雇十五名採用、土地臺帳ノ改調ニ六時迄、小生モコノ頃ワ六時近クマデ役所ニ頑張リ居リ、心境ワ乍併水ノ如シ、身體モ頑健。

再ビ御自愛御勉强ヲ祈ル。先ワ不取敢右御禮カタ〴〵　匆々。

昭和五年十一月二十四日　(丸　猟三宛)

滯京旬日ニ至リ道路ト橋梁トカフエート日比谷ノ菊ト東京會館ト新橋ノ藝者ト百名ノ税務署長ト大藏省ノ高等官ト濱口首相ノ遭難ト如水會館ト朝陽會ト兄ノ葉書ト栗山ノ新夫婦ト歌舞妓ト東京劇場ト松屋ト水谷八重子ト走馬燈ノ如シ。中央公論、改造兩方トモ十二月號買ツタ。後者マダナラ買フナ、祈御自愛。

昭和五年十二月二十九日　(水本京子宛)

オ忘レモノワ(ソノ他ニ)御座イマセンカ、本式ノ眼鏡ワ如何デスカ。モシ御持參ナケレバ、

度ノ會ツタ安物ヲオ求メノ上御常用ナサイ。御大事ニナサイ。

自炊ワウマク行キマスカ。

面白イデスカ。スキーワ滑ブ程ウマクナリマス。シツカリ御練習ナサイ。麻生サンニ會ツタラヨロシク御吹聽オキ下サイ。オ母サマ御大事ニ、山形エ御音信ヲ歡迎ス。御自愛アレ。

昭和六年三月十九日　（荒井正男宛）

三木善八氏ノ葬儀ニ列スベク母ニ倶シテ上京ノ夜行列車、仙臺カラ歸秋後間モアラナク。君ワ一體初段ニ何目ダイ、トニカク吾輩最初カラ無條件デ黑ヲ持ツヨウナコトワセヌ、君ガ dark horse デソウ強クナツテイルトシテモ少クトモ第一手合セワ握リト云フトコロダ、丸モ初メタヨシコレモ大シタコトワアルマイト思ツテイル、今度ワ東京ニ四日位滯在シテモヨイノデ如水會館、朝陽連ヤ、栗山君ナドニ會イタイト思ツテイル、宿ワ青山高樹町八ダ。秋田、山形雪ドコロ、スキーワ乍併トウトウオシマイニナツタ。祈、忙シキ君ヨ御自愛。 mon cher ami !

昭和六年三月二十四日　（田村敏夫宛）

滯在4日、昨日歸秋致シマシタ、 neon sign ノ銀座、春暖ノ隅田公園、向島ノ櫻餅モ食ツテ參リマシタ。

都會ノ贅澤ト浪費ヲカナリ見セツケラレマシタ、色々ナ人事ニモ際會シ、以前ヨリワ落付イタ、云ハヾ腹ニ或程度ノ鈍重ナル底力ヲ感ジナガラ、帝都ヲ歩キ或ワ又30錢タクシーヲ走ラセマシタ。

次ニカタイ話ヲチヨツピリ。最近直稅課長ノ作ツタ我署ノ見込ニ依ルト、本年度ノ個人純益、所得ノ減歩合ワソレゾレ稅額ニ於テ3割4割ノ大ニ達スル、貴署如何、少シクイトメルツモリダガ。

最後ニ、先日貴宅ニ置キ忘レタデアロウ所ノ Pamphlet「支那人ノ見タル日本ノ滿蒙政策」好便ニ御送付ヲ得バ幸甚。今 Mr. ワ上京中ナラン。22, 3日滑ツタリヤ。

昭和六年六月二十日　（母　宛）

御法事恙ナク終了。盛大ダツタ趣、何ヨリ御骨折御禮申シアゲマス。コレデ肩ノ荷ガ一ツ下リタコトヽ存ジマス。新裝ヲコラシタ墓石ノ前ニ參拜スル日ノ近カランコトヲ待望シマス。先ヅドウシテモ九月以降早クテ十月頃トナロウカト存ジマス。不眠症ワ大シタコトワアリマセンカ。運動ワ過不足ナキ樣祈リマス。挨拶狀ワ全部デ五〇〇枚近ク出シマシタ。アト簡單ナ轉居通知ヲモウ一〇〇枚モ必要カト存ジマス。

昭和六年八月六日　（原田正二郎宛）

御手紙有リ難ウ。

オ守ハ早速上京中ノ京子ヱ轉送御厚禮申シアゲマス。

卒業年鑑表ハ今朝早速、專賣局ヱ屆ケマシタ。急ニワ採用困難ラシイデス。ソノ都度狀勢ワオシラセ致シマス。毎日適度ノ運動勉强ヲ怠ラナイ樣ニ。算盤大分上手ニナリマシタカ。御勉强ヲ少シヅヽナサイ。

叔母樣エヨロシク。皆樣御大事ニ。

昭和六年八月二十二日　（細谷隆介宛、同ふみ子宛）

殘暑中々ニ嚴シイ折柄ソノ後皆樣御健勝ノ御事ト拜察大賀ノ至ニ存ジマス。

過日出京ノ節ハ種々御芳情拜謝致シマス。久シ振リニ御令閨雅子隆一郎ノ諸賢ニ御會イスルコトヲ得ソノ健康振リ成長振リニ喜ビヲ感ジタ次第デシタ。

次ニ昨二十一日午前三時三十分、京子赤十字產院ニ於テ男兒分娩母子トモ健全ノ趣昨朝電話アリ本日午後カラ小生出京ノ豫定。

今明兩夜高輪町泊リノ見込也、名前名案ナキヤ、ヒロク募集中、英一、誠一ナド當方デ考案。

出產兒ハ目方九百匁、完全、大キイ方ナリト。二十九、三十日ト土曜日曜ニカケテ又、上京ノ見込デス。

昭和六年九月四日　（水本京子宛）

隨分涼シクナリマシタネ。

明五日土曜カラ日曜ニカケテワ最近一ケ月間ノ恒例ヲ破リ小生上京ヲ見合スコトニ致シマシタアシカラズ。

テニス、ト野球見物ニ過スコトニ致シマシヨウ。コノ頃御氣先如何。

小生頑健、睡眠モ充分ノ方。

一正兄様文子サン、靖二サン、高子サンナド澤山叔父サン叔母サンガ歸ラレテ高君モ賑カニナツタコトヽ存ジマス。

皆様御元氣デスカ、又御勉強デスネ。母モ先ヅ丈夫、毎晩雨ノ降ラナイ時ワ露天浪花節ヲ聽キニ行キマス。

秋田ノ佐藤省三屬ガ大藏省講習ニ出席ノ爲メ上京、九日頃途次當地エ立寄ル筈、高島行子サマ長崎とし子サマ佐々木新吾様等々エ母出狀。

小生ワソノ後久保吉造氏ヤラ、田中太吉、太一氏アテ出狀致シマシタ。

原田正二郎君ノ件專賣局ノ側デ停滯中ニ實現難ノ模様デス。

高君大分大キクナリマシタカ。乳豐富ノ御事ト拜察シツカリ飲マシテヤツテ下サイ。

氣候ノ變リ目ワ大人モカラダニ注意肝心ナリ、寢冷、風邪引キ御用心。

日ガ短ク夜ガ永クナリマシタネ。ネムイ人ニワ、マコトニ好適ノ時季到ル。フレー〳〵。

ミンミン蟬ノ聲漸ク細ク、ツク〳〵ボウシト夜ワ蟲ノ聲、秋來ヲ傳ウ。

僕ノ手ニアウモノデ御希望ノ品ソノ他アレバソノ由誰カ秘書官ヲ通ジテオ申越アレ。

添田祖母上様初メ皆様エヨロシクオ傳エ下サイ。コレカラ晝休ノ散歩カタ〴〵投函ニ出カケル。

御大事ニ。

昭和六年九月二十四日　（栗山健吉宛）

秋冷ノ候益々御清榮ニ渡ラセラレル御事ト拜察、オ祝イ申シアゲマス。

過日ハ御叮重ナル御祝狀ヲ辱ウシ其後東京宛結構ナル品オ屆下サレ御芳情深ク御禮申シアゲマス、ソノ後母子トモ不相變健全今尙在京中、小生モ一度貴宅訪問致度考エ居リマスガ、未ダソノ機ヲ得ズ失禮致シテ居リマス、内祝トシテ輕少ノ品別送致シマシタカラ御笑納ヲ得バ幸甚ニ存ジ

マス。御身御大切ニ、奥様ニヨロシクオ傳エ下サイ。

昭和六年九月二十六日　（水本京子宛）

京子サマ

二十四日付オ手紙拝見、萬事O・K・母カラモヨロシク、大喜ビ、歸宅ノ日ガキマツタノデ。池上エハ鳥ノ子デ結構デスツテ。池上ヤ中延エワ無理ヲシテ身體ガツカレタライカヌカラシイテ行クニ及バズトノ説ナリ。（母）

僕ワ三日ノ午後迎エニ行キマス、四日カ五日ニ一緒ニカエリマショウ、從ツテ壽オ母様ニ一日ニ御同伴ヲ煩ハスニ及バズ。

萬事 merci（メルシー）、ミナサマエヨロシクオ傳エ下サイ。

カエルトキニワ文子サンデモツイテ來テ呉レル様ナコトニ運ベバ、オツキノ小生トシテモ最モ安心也。

三日午後六時赤坂山王下幸樂ニ於テ井上君歡迎會アル旨今朝伊藤靜夫ヨリ入報丁度都合ヨロシ

今日ワコレカラ郡部出張、明治、藥師寺兩村役場訪問後者ニワ弓削道鏡ノ遺跡アリ。

新シイ庶務課長キマル既ニ着任、池田時男君ト云ウ。

ドウカオ二人トモオカラダヲ御大切ニ、風邪ヲヒカヌ様ヒカサヌ様ソレデワ au revoir（オーヴワアール）又會ハン日迄サヨナラ、今明土日ニワ勿論上京取ヤメ、御諒承アレ。

昭和六年十月八日　（谷口豐三郎宛）

豐三郎兄

オ手紙有難ウ、益々御勇健、御一家御繁昌、何ヨリ意ヲ強ウスル、關西ノ中心ニ頭破ツテ折角御勉強ヲ祈ル。

山口渡英ノ送別會ニハ一本松カラ電報デ誘ワレタガ失敬シタ、奴サン二度モ行ク必要ガアルノカイ、誰カニ讓ツテヤレバヨイノニ、希望者トシテ僕ワ第一ニ手ヲ上ゲヨウ。

一本松技師昇任芽出度イ、淺村元氣ナリヤ、妻帶セリヤ、僕ソノ後御無沙汰也、千代チヤンガナクナツタテネ——、實ワソノ通知ヲ貰ヒ放シニ不義理ヲ重ネテイル。石田オヤヂトナル、僕モ

八月二十一日ニ長男高出生、黒色豐頬隆鼻ノ偉丈夫、親ニ似ズ圖太ソウダ。

關東ノ一角ニヒマダ、人生已ニ三十年、マダ油ガ乘ラヌ、ソノウチニ乘セル、隨感錄ヲ讀ンダ、「本ヲ讀マザルノ說」ソノ他面白イト思ツタ。

大藏省、重箱ノ底ヲホジクルノ說 yes & no. ソシテソノ兩方ノ意味デ一ツ兄等實業家ヲ財政ノ府ニ立テ、見タイ。

今夏ワ歸鄉モ出來ナカツタ、スベテハ Bonus ノ乏シキヲ手ニシテカラノ話、御父君ノ追憶錄ワヨイ記念ダ、老母モ先日覗イテイタ。

石田カラワ折々繪葉書ヲ貰ウ、小西、横井トワ連絡充分ナラズ、幸ニ身體ワ丈夫、ソノ内ニ大阪近クカ東京市内ェ榮轉シタイト思ツテイル、今ノ内セイゼイ稅法デモ勉强スルトショウ、奥樣エヨロシク。祈御自愛。

昭和六年十月九日　（二木金之助宛）

先夜井上君ノ會ニワ遠路態々御來同ヲ謝ス、久シ振リニ支那料理ノ御馳走ウマカツタ、五日、京子、高帶同歸宇、賑カニナツタ。

生活ハ再ビ平調ニ入ラントス。ダンスワ、タシカニ朝陽ノ先端ヲ行クモノダ。幸ニ御身御自愛ノ上、公私御健闘ヲ祈ル。一度久シ振リニユツクリ舊情ヲ暖ムル機會モガナ、嘉子サマエヨロシクオ傳エ下サイ。

日

誌